女鑑

明治四十五年一月二十四日發行

第百四十九號

國光社

女鑑第百四拾九號目錄

中里氏の女



再び愛に就きて

吾人は、前號に於いて、愛は人倫の大道にて、この愛情あるが故に、吾人等は、能く一身をなし、能く一家をなし、能く一國をなしゆくを得る事を說きて、さて、眞の愛なるものは、他の幸福の爲めに、他を愛するにて、自巳の幸福の爲めに他を愛するにては、眞實の愛といふべきものにあらざるよしを述べたり。今、これを、特に夫婦の間の愛に就きて、なほ、こゝに、詳しくいはむとす。

夫婦の者が、眞に相愛する道といふは、かくて、夫なる者は、其の妻の幸福ならむ爲めに、其の妻を愛し、また、妻なる者は、其の夫の幸福ならむ爲めに、其の夫を愛するが、眞に相愛する道なり。其の妻の幸福ならむ爲めに其の妻を愛するとは、やがて、一向に其の妻の身の幸福なれ其の妻の心の樂しかれとのみ心かけて、其の妻を愛するなり。而して、自巳の幸福安樂は顧みざるべし。妻なる者も、

また、其の夫に對しては、斯の如く自身のみ、幸福安樂は、露ばかりも思はずして、たゞに其の夫の身の幸福なれ、夫の心の樂しかれとのみ、其の夫を愛すべきなり。夫婦の者、互に斯の如く心がけなば、自巳の幸福安樂は毫も慮らずとも、夫婦が身は、共に能く幸福に、夫婦が心は、共に能く樂しきを得べし。

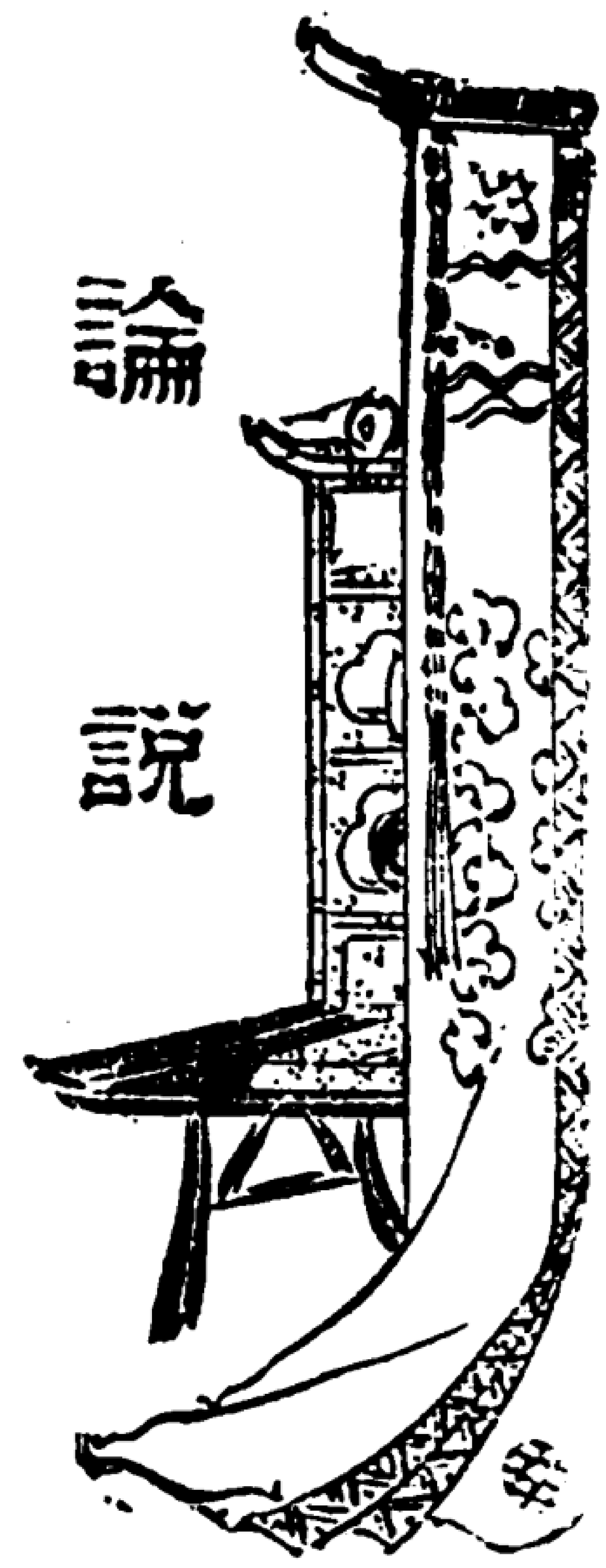
互にかく心がけゆくが、誠の夫婦の間の愛なり。されば、夫は其の妻に對するや、妻の身に苦しみも悲しみも過ちも無かれとのみ心がけ、若し露ばかりにても、さる方あらば、其の苦しみはいたはり、其の悲しみは慰め、其の過ちは補ひ正すやうせざるべからず。然らざれば、妻が身は幸福なるを得ず、妻が心は樂しきを得ざればなり。さては、誠に妻を愛する夫の道にあらざるなり。妻も、また其の夫に對しては、斯の如くすべし。然らざれば、夫が身は幸福なるを得ず、夫が心は樂しきを得ざればなり。さては、誠に夫を愛する妻の道にあらざるなり。

此の頃、新聞紙の報ずる所によれば、我が海軍の一將校に、矢部某なる男あり。一女子を見て、一向にこれを乞ひ望みて、やうやくに妻に迎ふるを得て、愛でよろ

こふこと、限りなかりき、さるに、其の妻不幸にも肺病といふ病にかゝれり。矢部某の不人情なる、肺病はいと忌むべく、殊に數多の費用を要する病なり、軍人の妻なれば自ら覺悟すべしとて、さらぬだに病を悲しみも苦しみもしたる妻に、劇藥を與へて、自盡を促したるより、妻は、餘りの無情を憤りて、終に身を海水の藻屑と捨てゝ、あへなき最期を遂げたりといふ。吾人は、此の報の眞なりや否やを疑ふ者なり。斯の如き人非人の、世上にある事を信ずる能はざるなり。されど、若、世にかゝる夫ありとせば、そは、實に妻を愛する夫の情を有たぬ者なり。夫となりて妻を愛する情なき者は、やがて、人情なき者なり。人情なければ、やがて、野獸なり怪物なり。人生に取りて、病ばかり、苦しく悲しきものはあらじ。殊に、さばかりむづかしき病にかゝれる妻なり。妻が心の悲しみと苦しみとは、實にいふべき方もあらざりけむ、其の夫たる者は、實に有らむ限の財を盡し、あらむ限の道を盡して、其の病める妻女の苦しみをいたはり、悲しみを慰さむべきなり。最も愛すべき妻女が身に、最も苦しく最も悲しき病なり。夫たる者、眞

に其の妻女を愛する情あらば、有らむ限の力を盡して、いたはりも慰めもすべきなり。我が手の折るゝも我が身の倒るるをも厭ふべき時にあらず。まして、財をや。いかでか一家の財を投げうつばかりを厭ふべき時ならむや。さるを、其の病氣を忌み、其の費用を厭ひ、これに劇藥を與へて、これが自盡を命ずる如きは、豈、夫たる者の道ならむや、否、世の人たる者の道ならむや。實に無情不德の限といふべし。吾人は、斯の如き報の眞なりや否やを疑ふ者なり。實に信ずる能はざるなり。吾人は、かゝる怪物の、世上にあらんことを、容易に信ずる能はざればなり。しかも、殊に誠情あるべき我が海軍の將校に斯の如き者あらん事は、決して信ずる能はざればなり。

吾人は、斯の如き報を疑ふ者なり。然れども、たよりにつけて、いさゝか夫婦の間の愛情を述べて、女子たちにつげまゐらすにこそ。



論説

女工教育

三輪田眞佐子

女子の思想、及び性行は、社會の風潮に影響するは、誰も知るところなれどこそ、女子教育を奨勵するは、間接に國風民俗を至善の域に導く方法となるなれ。むべなり、今日は、女子小學校の設あるのみならず、高等女學校も備はりて、女子教育を怠らざるは。されど、目下就學する女生は、わが國女子の全數に比すれど、極めて僅少なれば、純然たる學校教育のみを以て、一般の風潮までを改良せんとするは難きかな。おもひね、僅少の女子を、たとひ完全に教育し得んとも、多數の女子の墮落するを救はざるときは、などか、日本女子の面目を高尚にするとや言ふべき。おのれ聞く、外つ國に出でゝ醜業を事として、わが國辱を醸する婦女少なからずとかや。されど、彼らとて、人面を蒙むる以上は、猶われらの同朋といふの止むを得ざるとしおもはゞ、うたゝ感慨の情に堪へざるべし。内地にありとて、身を遊女として翫弄物にひさぎ、施

いて女子の品格を蔑視する感情の原因をなすもの多きは、あつぶすま重ね〴〵の遺恨にこそ。

蓋、人面獸心ともいふべき度外の女子は、朽ちたる木の彫るべからず、糞土の牆のぬるべからざるが如く、容易に正道に導く能はざらんも、せめては、普通の賤女のみは、墮落せしめざるやう企つるも、亦、社會改良の一端ならんかし。

近來殖産工業の隆盛に伴ひて、女工とて、諸の製造、及び工業場に勞働する婦女少からず、抑女工は、自力を以て生計を營むものなれど、他力に由りて無爲に歳月を浪費するものよりも、遙に尊きものぞかし。況して、女子なりとて、その天性に相當するわざを執るは、富國の源にして、寧、好みすべきことにこそ。

故に、これらは、強ち、賤女といふべからず。されど、女工敎育なるものありて、女工に相當なる技術を授くるのみならず、亦、幾分の精神を訓練して、後ち、業務に從事するぞかり女界が進歩する曉ならんには、女工は勿論賤業にあらざれども、目下のところにては、豫め敎育を要するほど高尙なる技藝の需用もなく、亦、かゝる敎育を受くる資力もなければ、おのづから、簡單なる支肢の勞働を營むに過ぎざるが女工の常態なり。

さて、女工には、相當の熟練を要するより、勢、年少の女子を採用して、勞働のまに
まに上達せしむる必要あるため、大概の製造、及び工業場には、未婚のもの多しとか
や。そは、如何にして敎育せらるゝか、若、既婚のものなりとて、その風習あしから
んには、亦、社會に濁波を起さしむる緒ともならんか。試に、女工の僻習を述ぶれば、

第一淫猥に流れ易し　そは、父母の監督を離れて、血氣の盛なる婦女達相群がりて、
終日勞働するとき、徒然なるまゝに、邪なる謠を歌ひ、邪なる談を吐きて、心の欝を
を散ずるを知りて、他に、一片の人道を敎ふるものなからんか。將に、心はぬば玉の
暗路に迷ひて、惡風に感染するは、自然の結果ならん。

第二一家の平和を破るべし　柔和は女子の德なるものを、女工は、未だ孝順貞節の
道を學ぶに由なきより、自分の勞働を以て、自分の生計を營むため、おのづから、親
の恩を感ずる心も弱きのみかは、良人に對しても、獨立の方便あるをほこりて、謙讓
の道を知らざるに至るべし。

その他、女工は、なべて男子を嫌惡し、大方の人に向ひても、浮薄の行をなすもの多
しとろ。若、これらの弊習增長せんか、知らず識らず一般女子の品格を汚すに至るべ
し。さいつころ、東京瓦斯紡績株式會社員來りて、わが社には、目下は、女工三百名

あり。將來は、七百名の豫定なり。つきては、そを監督し、且、傍ら、毎日二時間はど、彼らを教育する任に堪ふる女師の招介を乞ふ云々と。われ、これを聞きて、當會社の注意周到なるを悦ぶと同時に、世のあらゆる女工をも、斯くこそあらまほしけれと思ふなり。あはれ、眞に女界を憂ふるものは、一局部のみに心を用ゐてな安んじそ。

和歌の德

鹽井福子

和歌は、敷島の大和人がま心の匂ひ出でたる詞の花なり。こばれ出でたる詞の露なり。人は、すべて心もて立ち動けるものなれど、ものにあたりては感動せざる能はず、而して和歌はかくの如きものなれど、人の心を動かす事、極めて大なり。されど貫之卿が古今の序に、和歌は力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、武き武士の心をも慰さむるものなりとたゝへたる詞は、誠によくこれを說きたるものとて、千古に傳へられたる如し。

此の卿、かつて紀の國の任所より、都に歸りのぼられんとして、半夜ばかり和泉の國を通られけるに、いかにしけん、乘りたる馬の、俄に膝をつきて行かざりけるに、い

といふかしく覺ゆ、たゞずみ給へるに、道行く人云ふ、それは此處の神のたゝりなり、年頃社もなく、知れる人も侍らねど、常にあらはれてはとがめ給ふ神なり。さき〴〵もかやうの事侍りきと申しければ、貫之卿おどろき、直ちに馬より下り、旅中の事故さゝぐべき幣帛の用意もあらねば、ひざまづきて如何なるみ神にましまして、かくはとがめたまふにやと問へば、その人蟻通の神と申すと云ひければ、貫之卿聞きもあへず、

かきくらしあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべきやは

とよまれけるに、膝を折りたる馬、忽ちおどり上りて、常よりもまさりたる駿足となれりとぞ。げに鬼神も感ぜしにやあらむ。また、先きつよに、世の中久しうひでりせし時、小野小町、

あめにます神もみまさばたちさわぎあまのと川のひぐちあけ給へ

とよみけるに、にはかに空かきくもり、雨こぼるゝばかりにふれりといひ、また能因法師、伊豫の守に伴はれて下りけるに、夏のはじめ之もひでりつゞきて、民のなげきあさからざりければ、神は歌を好ませ給ふなり、試みによみて三島へ奉られよと、國司の頻りにすゝめければ、能因、さらばとて、

天の河苗代水にせき下せあま下ります神ならば神

とよみて、みてぐらにかきて、社司をして奉りけるに、誠にや、雨おびたゞしく降り出で、枯れしをれたる民草、おしなべて生きたる色になりけるが。また和泉式部、かつて人を思ひわぶることありて、貴船明神をたのみて詣でけることありしに、御手洗に螢のとぶを見て、

物思へば澤の螢も我身よりあくがれ出る玉とこそ見れ

とよみけるに、社の中に聲ありて、

奥山にたぎりておつる瀧つせの玉ちるばかり物な思ひそ

と、明かに聞えければ、明神のかへし給ふよとかしこく覺えてありけるに、果して其のしるしありて、その人にもまた逢ふを得たりと云ひ、また、小式部内侍が病あつくして、今や限りとも見えければ、母なる和泉式部いたく悲しがりて、額をおさへて泣きけるに、小式部僅に目をあきて、

如何にせんいくべき方も思ほえず親に先立つ道をしらねば

と、いと弱き聲して云ひければ、天井の上に聲ありて、あなあはれと云ひてけるが、やがて、あつかりし熱もさめ、病もしづまりしと云ひ。また赤染衛門は、其の子擧周の

和泉の任さりて後、重き病にかゝりけるを憂ひて、住吉の社に詣でゝ、身を以てかはらん事を祈り、

かはらんと思ふ命はをしからで

と云ふ歌を奉りけるに、其の夜白髪の老翁ありて、此の幣を取りあげ給ふと夢見たるが、やがて、其の子が病愈えたりとか。また式部とか云ふ女、世におちはふれ、いたく住みわづらひ、太秦に詣でゝ、福來らん事を祈りけるに、傍にありける人、神は病をこそ愈すべけれ、富をいかで、與へんやと人の云ひけるに、

なむ藥師あはれみ給へ世の中に住みわづらふも病ならずや

と歌ひけるに、そのしるしにや、やがて幸ある身ともなりしと云ふ。これ等は元よりいとおぼつかなき語草にはあれど、かゝる事を傳へたるも、つまりは歌の徳のいみじきをもてはやすより起れる事どもなり。また有常の女は、風吹かむの歌をよみて、業平が外心を失はせ、大和の國の女は、

我もしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け

と云ふ歌をよみて、他の女にうばはれし夫の心を、元にかへし、下野の女は、

舟もいぬまかぢも見えじ今日よりはうき世の中をいかで渡らん

の歌を唱して、男に捨てられずなり、また、ある女は雨のふる日、家をば追ひ出されんとして、

ふらばふれふらずばふらずふらずとてぬれてゆくべき袖ならばこそ

とよみて、夫に呼びもどされ、赤染衛門は、夫が久しく三輪の女の許にをりて、衛門が方には中絶ねてけるを、

我が宿の松はしるしもなかりけり杉村ならば人も尋ねん

とよみやりて、まどへる夫の心を正しぬ。それは、男女の中をやはらぎたるにて、さては、また勅なればのかしこき歌奉りて、かしこき帝のうしろみをかうぶりたる紅梅が内侍が事、辨の内侍が盃のわれしを月によみなして不吉を吉事になし、國依姫が、

山背のつゞきの宮に物申す我が背を見れば涙ぐましも

と歌ひて、皇后のれん怒りをなだめまつりて、兄が任をはたさせし等のためし、いと多き中に、僅に三十一文字を以て美濃の國をとりもどしたるいみじきためしさへあり、應仁の頃、下野守東常緣とて、下總國千葉氏の一族なるものありけるが、父祖の世より美濃國郡上の城主なりしが、一門の亂をしづめんとて、久しく下總に下りをれるまに、其の城を齋藤妙椿と云ふ同國の士にせめ取られければ、亡き父の忌日に當る日、ひ

かしを思ひ出で〻、

あるが中にかゝる世をしも見ざりけん人のむかしのなはも戀ひしきと詠めるを、京なる友の許に書きて送りけるが、遠近に語りつたはりて、はては妙椿の耳にも入り、いたくあはれがりて、郡上の城を返したりと云ふは、かの春秋戰國の世に、趙の名臣藺相如が、口舌を以て秦を伏せしめし事にもまさりて、和歌の徳もいみじからずや。實に敷島の大和には、此の敷島の道をれきて、外に尊き道やはある。されど、實源律師、攝州なる下﨟の堂供養の導師に請ぜられ、説法しけれど、雜人共さまぐの聲にのゝしり合ひて、説經も何も聞かぬに、律師、説經をとゞめて、高座の上より、

つのくにのあしかり聲の高ければおながまどこそ云ふべかりけれ

と和歌をよみ上げけるに、はじめて人の音も靜まりけりとぞ。これどかりにても佛の道も、此の道には劣れるを知るべし。

かどかりめでたき歌を、たゞ狂言綺語なりとて、徃々そしるものもあれど、そは誠の歌の道を知らぬものゝ言にて、むかし惠心僧都といふ法師は、さ侮りてよまざりけるを惠心院にてあけぼのの湖をながむる折りから、沖より船のゆくを見て、誰とは知ら

ず、

　漕ぎゆく船のおとをしらなみ

と云ふ歌の句を歌ひしを聞き、いたくめでゝ、和歌は觀念の助緣となりぬべかりけりとて、それよりは、歌に心がけたまひしとぞ。和歌の力や斯の如く強し、和歌の德や斯の如く高し、これ、和歌は、優美なる人のま心のこぼれ出づるものなればなり。されば、また、ま心よりよまざるべからず、かゝれば、これを知ることは、優美なるま心を養ふたよりともなれば、優美なるべき我が日本の人は、おしなべて、これを樂むべき道ならむ。殊に、優美なるま心を本としたる和歌は優美なる女子の性に適したるものなれば、衣通姬、小町の古人の秀れたるきはより、幾千年の我が敷島の道の隈路に、色も香もめでたき女流の歌仙も少からず。あはれ、今の貴女、淑女の方々、古に恥ぢぬこの道の心がけこそあらまほしけれ。



豊玉姫命

五十園徳文

豊玉姫命は綿津見の神の御女にて、彦火々出見尊の御妃にませり。はじめ彦火々出見尊、海津見神の宮にいでましき。時に綿津見神出で見て、この人は天津日高の御子、虚空津日高にませりとて、すなはち内に率て入れまつりて、美智の皮八重を敷き、また絁疊八重をその上に敷きて、其の上に坐せまつりて、百取の机代の物を具へて、御饗して、すなはち其の女豊玉姫命を婚せまつりき。さて三年ばかりありて後、さるべきよしありて彦火々出見の尊は本つ國にかへりましき。かくて後に、豊玉姫の命みづから參る出て、奏したまはく、妾はやくより姙身めるを、今臨產べき時になりぬ。こを念ふに、天つ神の御子を海原に生みまつるべきにあらず。故に參出つとまをしたまひき。かゝりければ、すなはち海邊の波限に鵜の羽を葺草にして、產殿を造りき。こゝにその產殿いまだ葺きあへぬに御復たへがたくなりたまひければ、產殿に入りましき。さ

て御子産まんとする時に、其夫君にまをしたまはく、すべて他し國の人は、臨産をりになれど、本つ國の形になりて生むなる。されど妾も今もとの身になりて産みなん。妾をな見たまひそとて御子産みたまふを、出見命その言を奇しとおもほして、かいまみ給へど八尋わにゝなりて匍匐ひもこよひき。尊見おどろき畏みて逃げ退きたまひき。豊玉姫命そのかいまみ給ひしことをさとりて、心恥かしと思ほして、其御子を産みおきて、妾つねは海つ道を通して、往來はんとこそおもひしか。わが形をかいまみたまひしが甚作しきとて、すなはち海坂を塞きて返り入りましき。こゝをもて其のあれませる御子の御名を、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命とまをす。然れども後は、其のかいま見たまひし御情を恨みつゝも、敬ひ戀ふる心たへがたくて、其の御子を育しまつるよしによりて、弟玉依姫命を奉るにつけて、御歌を献りき。

赤玉は緒さへ燿れど白珠の君がよそひし尊かりけり。

出見の尊きゝたまひて、またこたへ歌よみたまへりき。

いそのかみ古き世のことを、今の世の目より見れど、奇しと見ゆることも多かり。されどそれはさもありけんこと、古き傳なれど、今うごかすべくもあらず。今この豊玉姫命の夫君彦穂々出見尊を尊び敬ひ給ふみこゝろは、このみ歌に見ゑて明かなり。後

の世の姉たらんもの、夫を尊ひ敬ふことかくぞあるべき。

中里氏の女

鹽井ふく子

浪華津にさくや此花とよみけん、谷川に打ち出る浪も、やがては聲たてつべき春とはなりぬ。いざ〳〵、早く言の葉の花咲かせ給へ、あはれなる音たて給へ、年も年、今年は三十まり一つ、げに敷島の大和心、大和言の葉、うるはしうそめて、秋津島根を、さながら紅に、みどりにてきませ、大和錦を織りはへ、ちゝのみの父のみことの心をもなぐさめ、はゝその母のみことの心をもよろこばしめ、夫をも和らけ、兄にも仕へ、姉にもかしづき、弟をもめで、妹をもいたはり、はては婢僕をしても恨みなからしめ。心を和らげ、身を和らけ、人を和らげ、家を和らげ、國を和らげ、世を和らげ、天地をも和らぐ。世にいみじきは和歌の徳なり。されど、いたづらに言葉をかざりて、誠少きは、歌の本意にあらず。たゞ誠心をうたひ出でゝこそ、歌はよく人を動かすべけれ。茲に一首の歌よく父の心を和らげ、母の身を全くしたる物語あり。いつの頃、何處の里にかありけん、中里某といふものありけるが、其の娘、名は何と呼びけん、形は如何にありけんもらしたれど、心ざまいと美はしう、手習ふわざ、裁ちぬひ、心を

用ゐてつとめけるが、ある日、何某、如何なる事にかありけん、年來あひなれたる妻を去りけるに、娘は悲しみて、いたくなげき、父をながめ、母にとりすがり、よゝとなきけれど、さらでも子故には心もやみなる母はいよ〳〵かきくれて、かなしき子をれきて何地へも行くべき方覺えずとて、之もなきわびぬれど、父はなか〳〵に醜のますらを、心もこわく、思ひしぼりしあづさの弓のひきかへすべくもあらず、すがる女をかきのけて、追ひ起てしに、妻女は悲しき夜の鶴、うつくしき子をれきて、泣く泣くやみぢに迷ひたちたり。

娘は、今年やう〳〵十六歳、二八の春の初心、むつきだつ空の春風に、笑みもこぼれんを、之はめぐみの雨露を失ひて、はゝ笑まん力もなく、たゞ春霞、うつ〳〵と思ひくらし、十六夜の月の光りも天雲にかきくれて、はれずのみながめあかしけるが、やがては更衣の空うら〳〵と、隣の梅が花は早くもこぼれ出で、鶯のひなひきつれ、枝うつりする聲うつくしう、見仰れど軒のはゝそも新葉だち、垣の柳ももえ出でゝ、いとものどかに、こち吹く風になびきぬるに、少女はいよ〳〵うち守られて、ひたすらに母の戀しさに、はては難波津のなにはの事もれもはねず、手習ふ紙に、

枯れにたる中ぞかなしきたちかへるはるのはゝそを見るにつけても

と涙ながらにかきつゞり、よゝとばかりに泣き沈みけるに、父、何事にかあらんと思ひ、そつとうしろにたゝずみて、手習ふ草紙をのぞき見れば、うすずみの色もあはれに、右の歌のかきつけあるに、いみじう感じうつくしがり、あしかりしわざをばなしにけるよとて、遂に妻を呼びかへし、それよりは、夫妻むつまじう、波も風も立つことなかりしとぞ。げに、やんごとなき子寶、返す〳〵もめでたきは大和歌にて、千代も朽ちせぬは心の花のかをりになむ。

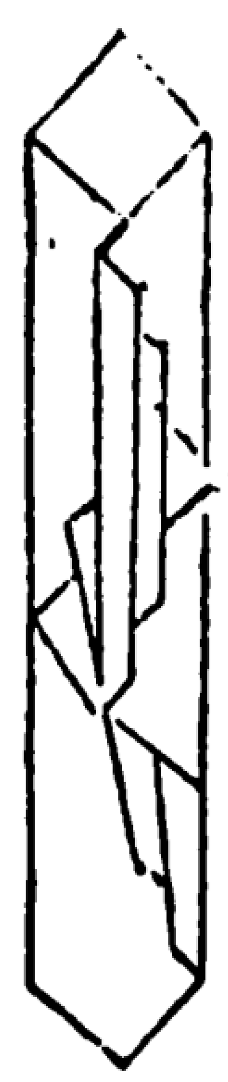
家政



折形

有住齊

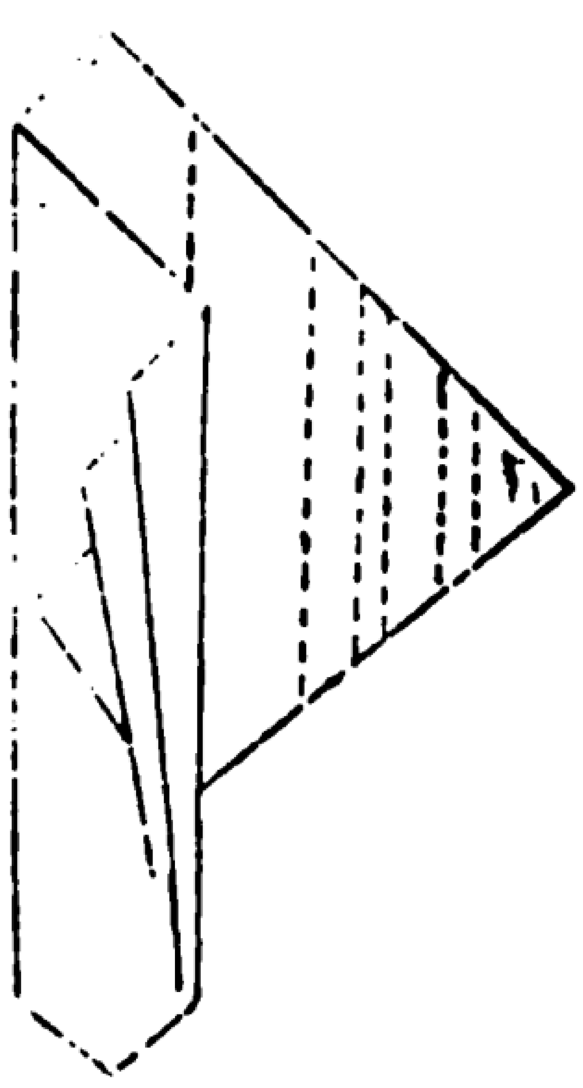
鷹大緒包　紅、紫、茶等の大緒也。



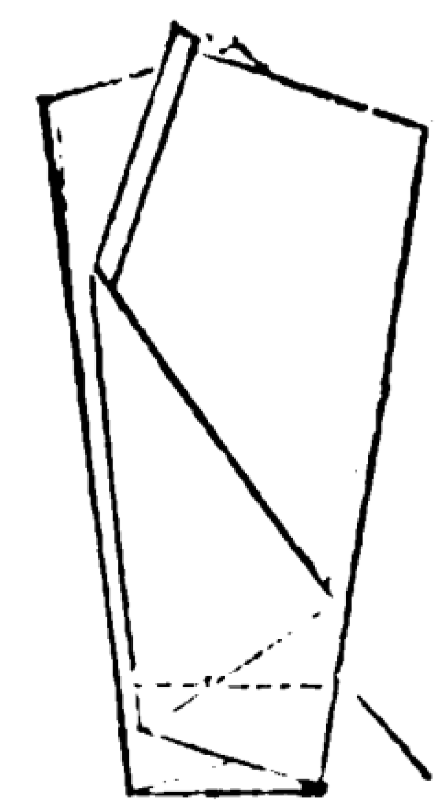
大緒幾筋と書くべし。

おなじく右を開きたる圖次如

鷹の尾包　尾羽を進物にするときに包む折形な



り。眞羽も是に包むなり。



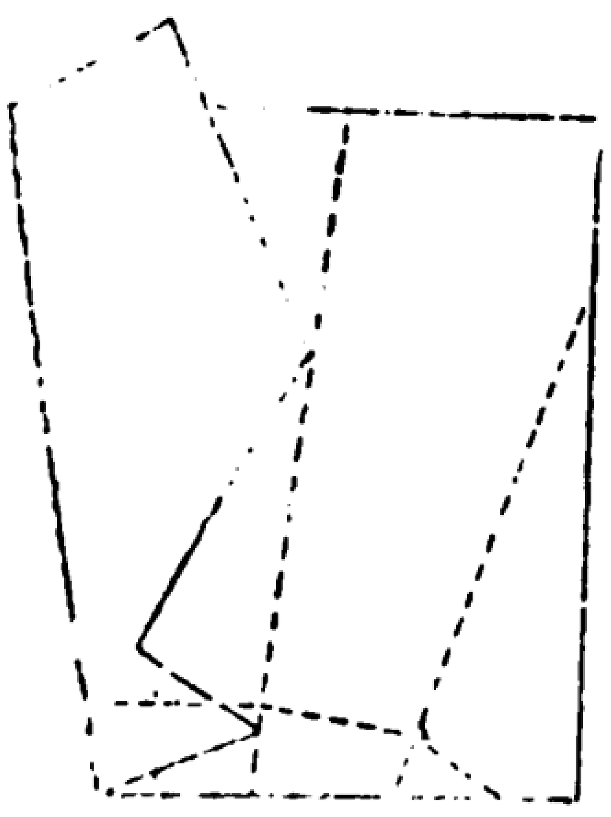
此の點線の處裏に折り返すなり。

眞羽は尾十二枚あるなり。

大鳥といふは十四枚あるなり。眞羽とは鷲のことなり。何も矢の羽に用うるなり。



れなじく右に折り目を開きたる形



れなじく右を皆開きたる形

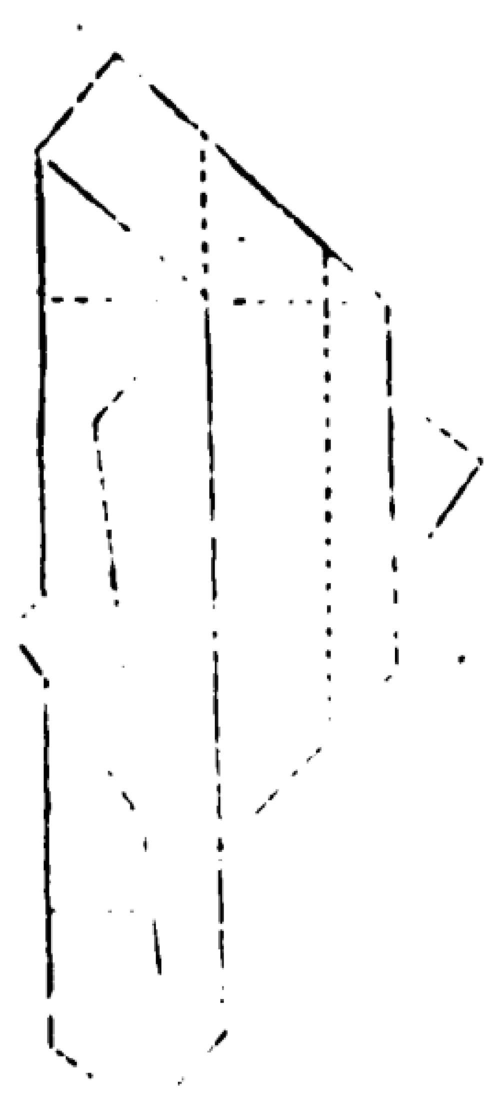
天筋幷鈴包

鷹の大緒に付け、鷹いかようにくるひても大緒もつれざるやうにねぢになりたる金物なり。是を一ッ二ッと書くなり。

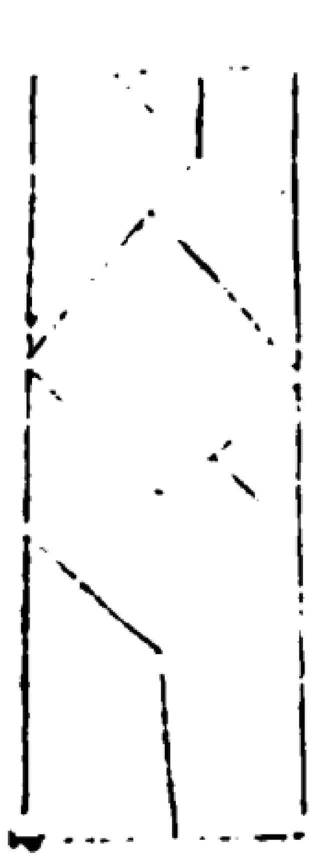


此の點線の處裏に折り返すなり。

此の點線の處裏に折り返すなり。



れなじく右を開きたる形



れなじく折り上げたる裏の形

茶の湯

孤峯庵篠仙發不羨
關　葦雄

濃茶手前（續）

次に左手にて腰の帛紗を取、左の膝頭の方へ持行、右の手帛紗の折目に名差指を入持、左手を離し、向の方を取、帛紗の左の隅へときながら送り、左右の手にて隅と隅とをたるめて引張、（是を塵拂と云、左右の拇指を上に見て、名差指以下四本にて前の方を持込引張べし、尙紙上に書き難き場合もあれど口傳に譲るべし）（右手に右の隅を持籠み、左の手にて持たる隅の際を右手の指先にて持、左の手は又左の隅にときながら送り、右手に持籠たる跡の方を放すべし。

次に前の如く、左右の拇指を上にして引張べし、又前に示せし如く指を働かして塵を拂ふべし、如斯する事四方同し事なれども、三つ目は跡を放たずして、四つ目を塵拂して後に三つ目の跡に持たる方を放せど、帛紗の折目違はずしてよし、扨四方塵拂濟たらば、薄茶の時の如く、滿にして塵打すべし、次に左手を放し、三つに折摑、以下薄茶手前の時の如く疊、右手に持膝に搆へ、次に左手にて濃茶入を持、前の中央にて右手に持たる帛紗にて、茶入の蓋の摘の向前と拭ひ、帛紗竪にして折目を向へして、右手の掌中に持籠、茶入の胴を是に糊着せしめ、茶入は左手にて向へ廻し、右手は前へ運び拂ふこと、茶入二廻轉を定法とす、（茶入は都て置形ある處を面前と定め、廻轉する時是を目當にすべし。且茶入は、形容種々にあれ共、先爰にては肩衝と見做べし）即二廻

して止り、帛紗を横にして下へ掛ひ卸し、一旦留り、一鈔時間留置く心持して、帛紗を取離すべし。偖茶入は、炉の左隅と水指とを筋違に直線して四つに割、眞中を目當にして、左の方へ寄せて置付べし。次に帛紗を疊み直し、左り手に持、左の膝頭に置、右手にて茶杌に懸わる茶杓を取、薄茶の時述べたる如く拭ふべし、拭ひ終りたらゞ、茶入の摘より右の方にかけ置べし、(但、節と摘と對する樣にすべし、尚掛方に口傳有)次に、右手にて茶筌を取、茶入の右の方へ疊目四つはなして置付べし、次に右手にて茶椀を持、膝と爐椽との眞中に置付べし。次に左手に持たる帛紗を右に持歸る時一つ開き、又裏の方へ折、右手に持水指の蓋むねの前の處をにの字に掛ふべし。其の帛紗直に左へ持替、右手にて茶椀の中に入置たる茶巾を持、水指の蓋の上へ置、次に帛紗一つ開き、上の隅を引立、左手にて一つこき、引張て二つに折、左手にて腰に付べし、次に右手にて柄杓を持(但、持方指付手付は薄茶の時示したるに差違なし)而して、柄杓を搆へ、右手にて釜の蓋を取、蓋置に置右手柄杓の元を持、向の方へ押出し、眞横にして、左手の節際拇指を節の向へ迯り、前の方節と先との眞中を右手にて篤と持、湯を汲べし(但、此の時は、合一杯入て汲上ぐべし)茶椀に入柄杓を左手へ移し搆へ、右手にて釜の蓋を締べし、(但、此の時は、締切行引べし、次に右手にて茶筌を茶碗へ入、茶筌湯治べし是を中蓋と云、次に、柄杓を右手にて蓋置へ持する事三返、後茶筌をさは〳〵と振濯ぐ等薄茶の時の如し、又茶筌を茶入と置合、茶碗右手にて取左手へ移し、湯を翻し、茶碗を起し、右手にて茶巾を取薄茶の時の如く掛ふべし。次に茶巾を茶碗の中に入

置、右手にて茶碗下に置右手にて茶巾を水指の蓋の上へ戻し、右手に茶杓を取持、右の方膝上に控へ、左手にて濃茶入を持、右手に持たる茶杓を繰込、末四五の指にて持、拇指、名指、中指、の三本にて茶入の蓋を取、茶碗と並へ置、茶杓繰出し、三本の指先にて持茶入は茶碗の左の方椽より僅少上げて、幾分茶碗の方へ傾け、茶を掃入べし、分量は人數次第見計らふべし、能程入たらむ、茶杓は茶碗の椽へ掛(但、貝先仰向)右手にて茶入の蓋を締め、茶入元の處へ戻し、右手にて茶杓を取、左手を添持直し、左手にて茶碗を持、右手の茶杓にて茶を解くべし、能解き終らは、茶杓を引揚け、茶碗の椽にて茶杓に付たる茶を拂ひ落し、直に茶杓は茶入へ元の如く掛べし。

(以下次號)

向、本文の段落不十分なれ共、本誌家政欄内紙數限りあれは、不得止次號に譲る。

女の禮

有住禮節教場の授業始にのぞみて

をしへ子のすゑのをしへ子

むつきこゝぬかの日、わが有住教場にて。年のはじめの授業はじめをすとて、人々つどへたりけるむしろにて、をしへ子たちの、おのがじゝ語りかはし記しいでゝ、かたみに、禮の道の學のために、とひこたへにしを、きゝたりしまゝ、つたなき筆にうつし、よみ幻たるまゝをもうつしいでゝ、そのむしろのみのものと、なしはてんがあたらしさに、かきつみて、禮のことすきたまふ君たちにわかたんとはすなり。

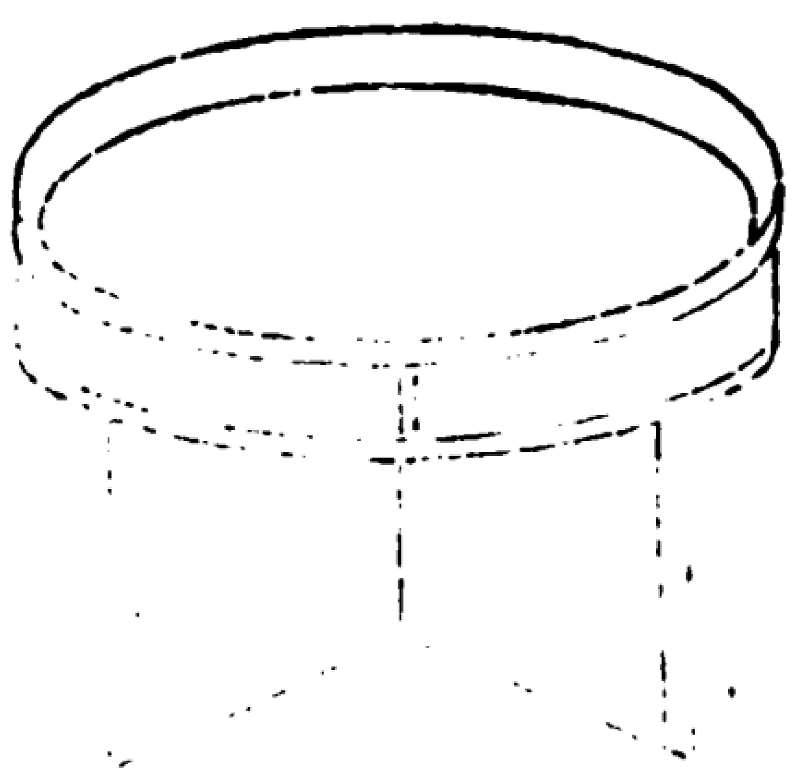
さて、皆からとは思ひたりしが、さては、うるさ

からむとて、ひとつふたつをしるしいだせるなり。

齒固飾り方

新玉の年のはじめの料として調へたる齒固のかゞみもちひの様をものして、學の道のあねぎみいもとぞちに見せまゐらせ、そがよしあしををしへたまへといのりまつるになむ。

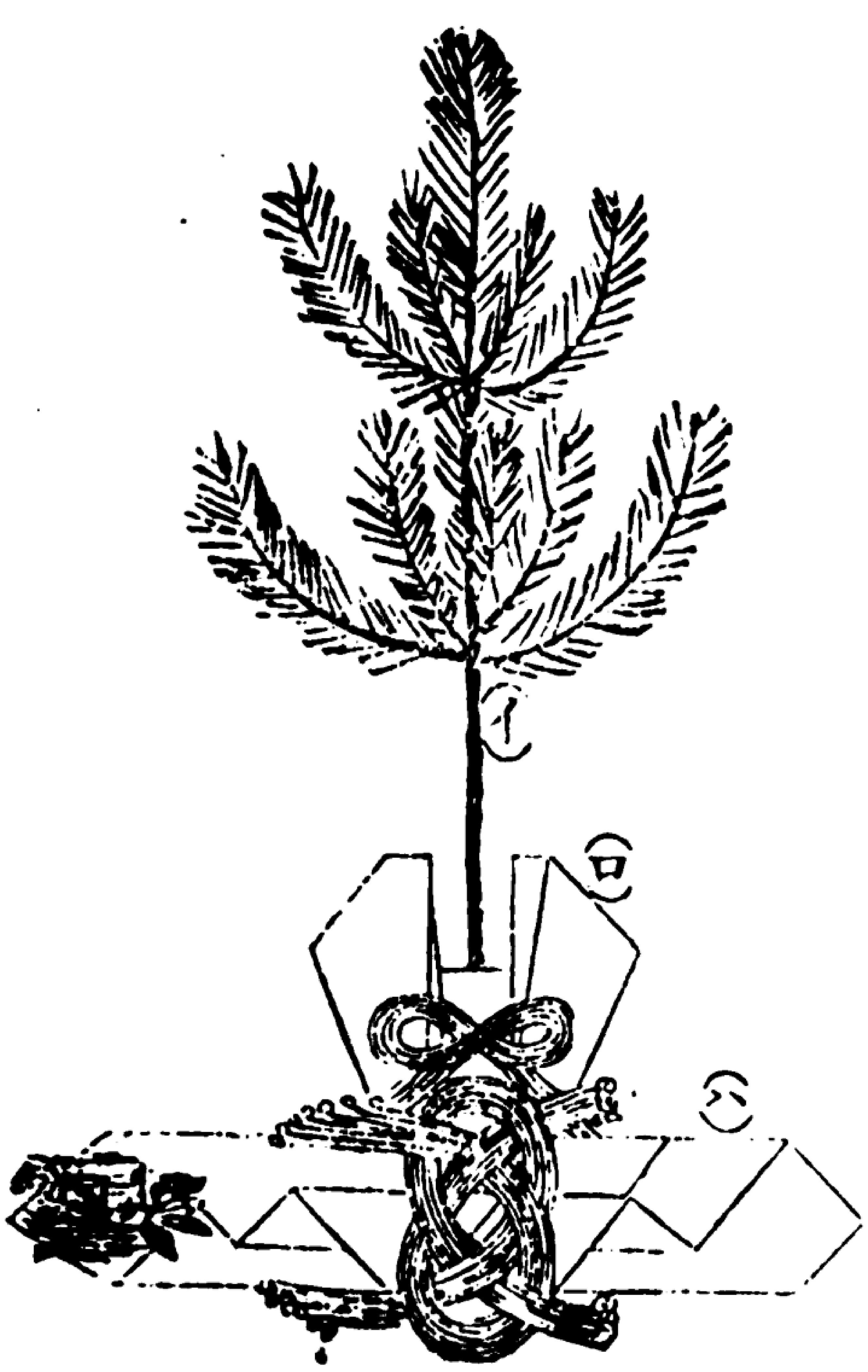
御鏡餅をおきたる臺、檜にて、圓くつくり、組足をつけたり。こは、三方、又遠山臺などの方ならね、高杯などの圓きかたをとりて、足は、位高き御わたりにては、用ひたまふまじき組足にと、わざとまうけたるなり。

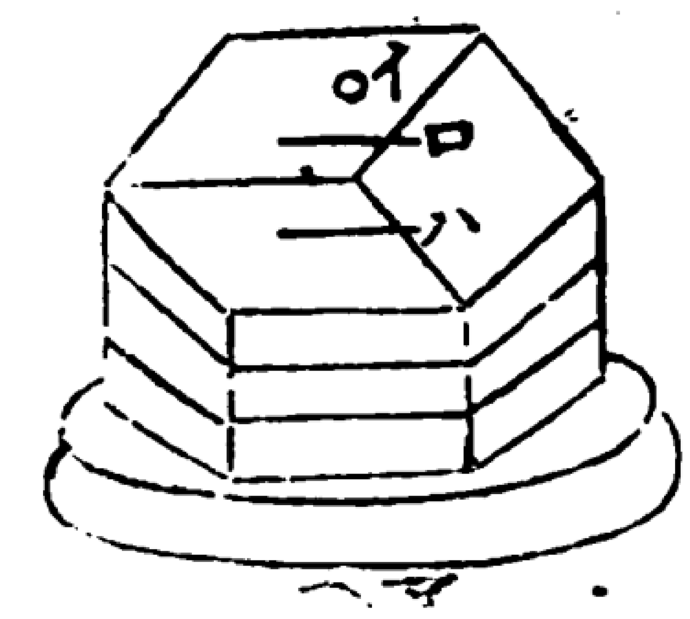


餅は、圓く平く、厚み一寸五分あまりにつくらしめて、二枚を一重にかさね、うへに菱花辨、七分あまりのあつみに、十二枚を、龜甲形におきあはせたり。

圓なる餅は一重とも白きをもちゐ、菱なる餅は、半を小豆粉にていろつけたる赤いろなるもちひをもちゐたり。

○餅の上に、心葉に、五葉の若松をたてたり。松の前に、萬の物つゝみたる福包をおき、又、のし鮑、昆布、串柿、薮柑子を、串柿包に包みておきたり。

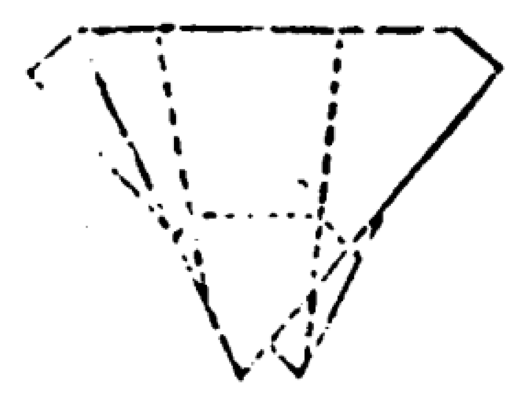




萬の物包みたる福包と名づけたる包は、勝栗包とて古くより用ゐきたれる包かたなり。

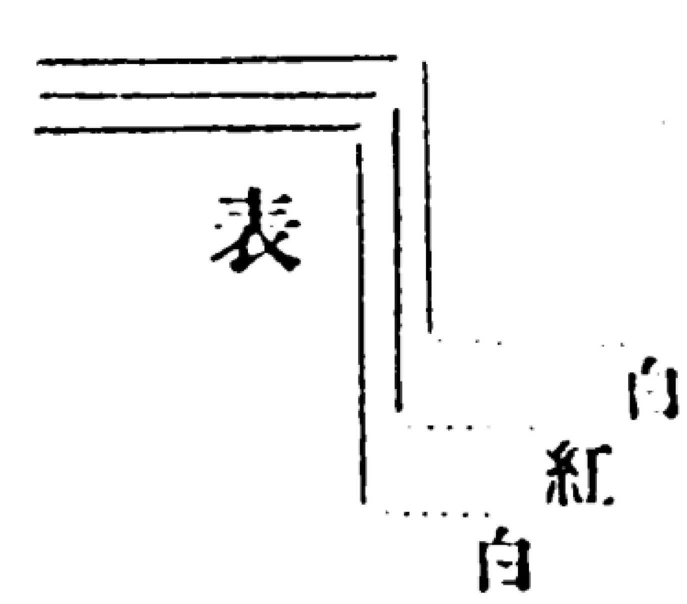
つくりかた

奉書紙の白きと紅なるとを合せて、表に白きを出し、うらに、紅を入れて、四方にたちこの圖の如く少し筋違に三角かたにをり又、點線の通りに、一旦左右を内部に折り、又之を啓きて中に萬の物を入れ、元の如く左右を折り、又下を裏に向けて點線の通りに折り、金銀の水引をさしとほして、諸輪むすびに結ひなしたり。

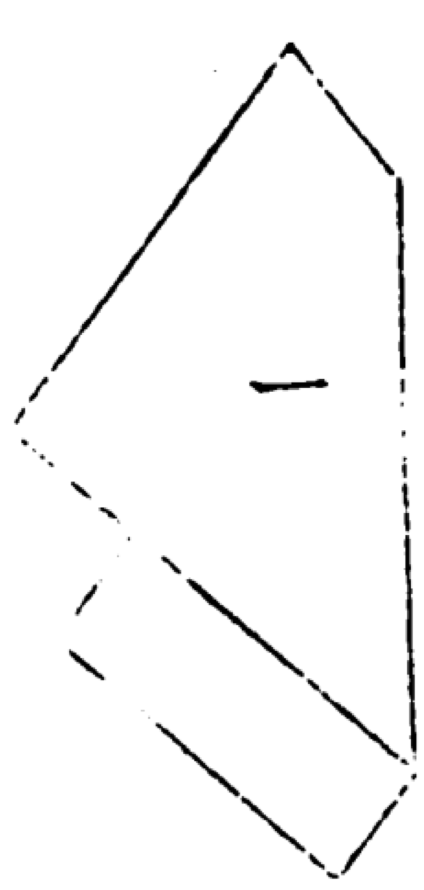


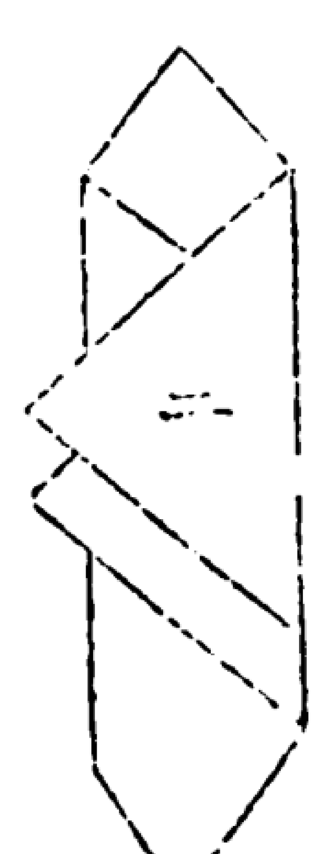
萬の物とは、米、かちぐり、かや、數のこ、たつくり、などなり。

昆布、のし鮑、やぶからし、串柿を包みたる包みつくりかたは、れなしく奉書紙にて、たて一尺一寸五分、よこ八寸にて、まづ白きをたちて、紅なる紙のれはきなる上に糊にてつけて、四方とも一分づゝ匂ひをとりてたちれとし、また白きを下につけて、一分づゝ匂ひをとりてたちれとし。



かくかさねて



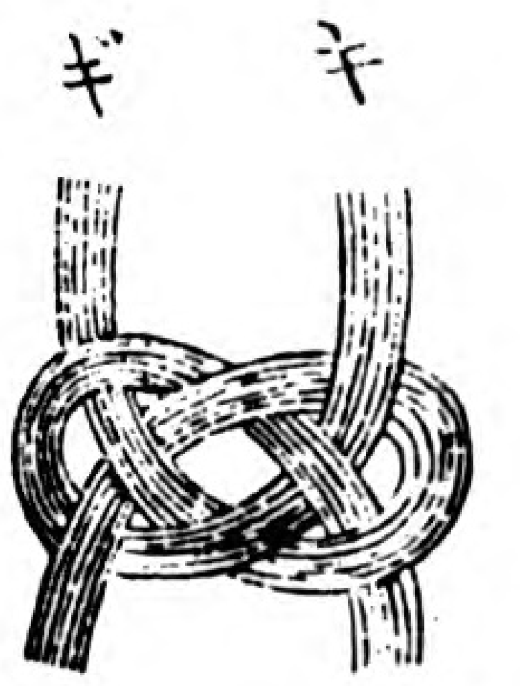




かくなりなしたり。

上につけたるあはびむすびのつくりかたは、金銀の水引、たけ三尺なるをもてつくる。七本あはせて、たひらにならべまなかを紙にて貼りて、かはかしれきこれを貼りたる眞中をきりて、金銀と二つになして、金銀ともに一尺五寸の眞中を、八尺九寸ほど、左手にさきの方をもちて、右の手にて、拇ゆびを上に、人指ゆびを下にうけて、つまずれぬやうになできて、水引のやはらかになりて、圓にくせのつきたる時をよしとなし、さて、金銀を、





かくくみあはせて、上の方をひとつになし、錐にて共にとめれき、動かぬやうなしれきて、串柿包の巾よりちとせまき程に、圖の如く組みて、糊にてとめ、これをかはかしれき、下の短き端の方を一本つゝ、細串にて、左の手の人指ゆびを下　直になし、拇指を上にして、水引のはしをとり、串を上にれして、すこしつゝ向の方へ巻きては拇指をあげてまがりたらぬかとならべ、かくなしなして、ほどよき所まで巻て、まきならべ、（まきそむるさき、こゝろもち右にひねりおきて、まきそむる）左右七本つゝ皆如斯して、次に、上の方をまへに取直して（まへにも此時にも上に重みななし動かぬやうなしおきたりき）紙の貼りある處だけを切



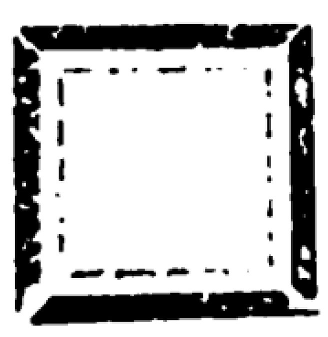
りて、また巻きて、このたびは、みじかき方より巻きそめて、まきあげて、つくりなしたり。

たちぬひ

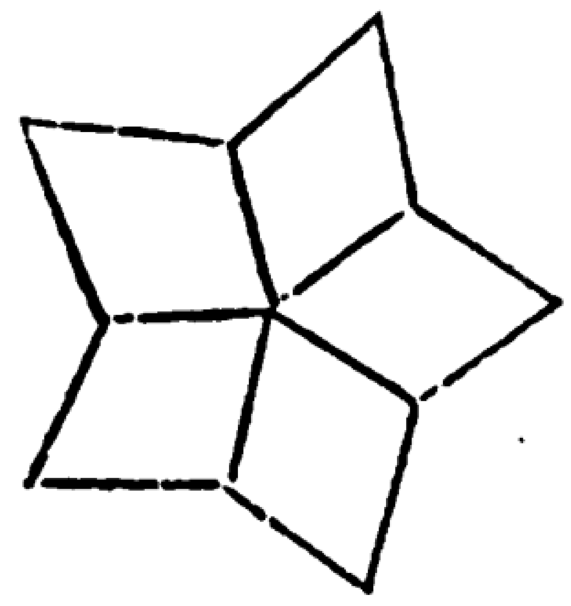
西山たい子

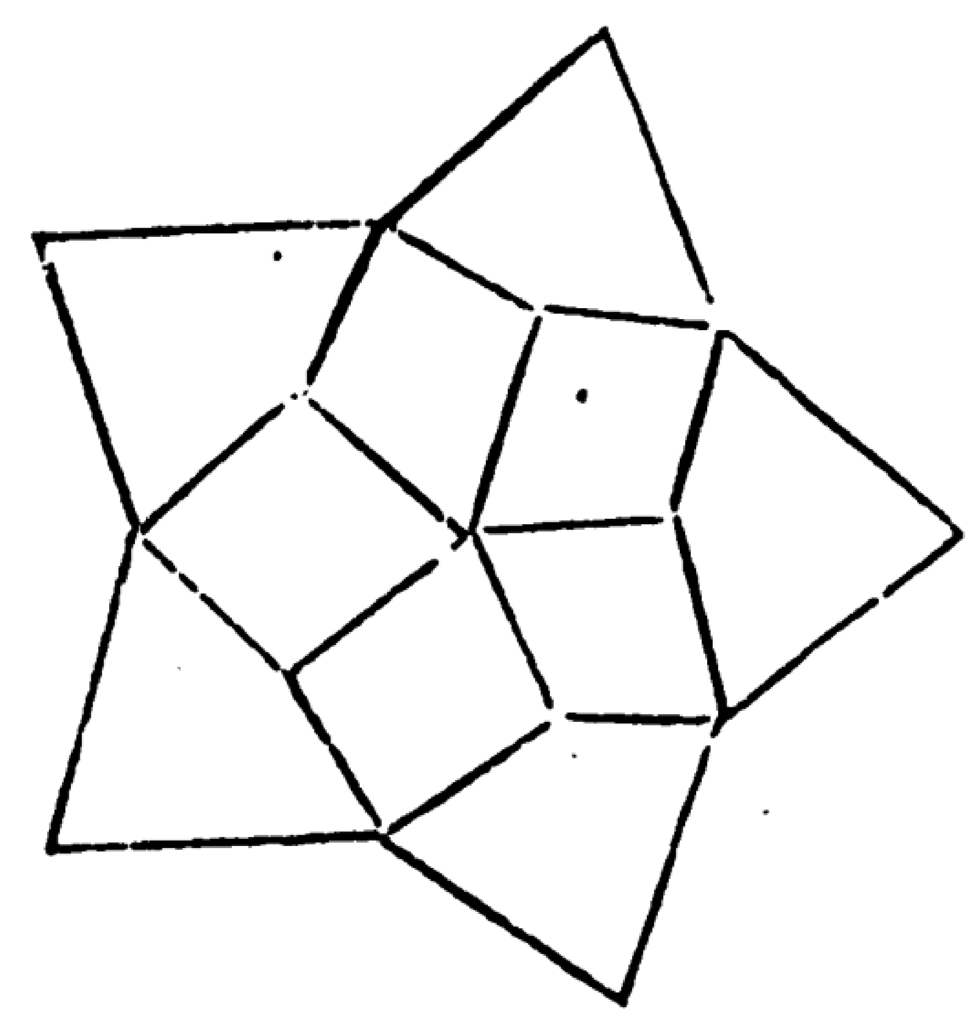
（八十五）桔梗袋の縫ひ方

まづ表になさんと思ふ切れを、紙形と同じく裁ちて、其の裁ちたる切れの裏がはに、紙をつけ、下圖の如く、まはりを、しつけ糸にて、各とぢ

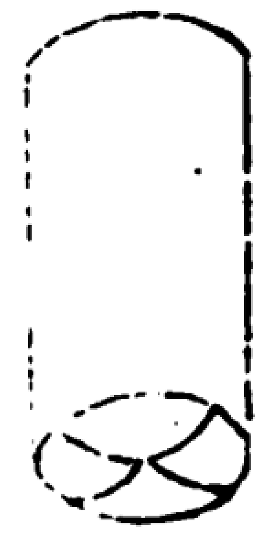


つけおくべし、閉ぢ縫らでまづ底を上圖の如く五片縫ひ合せ、それより、

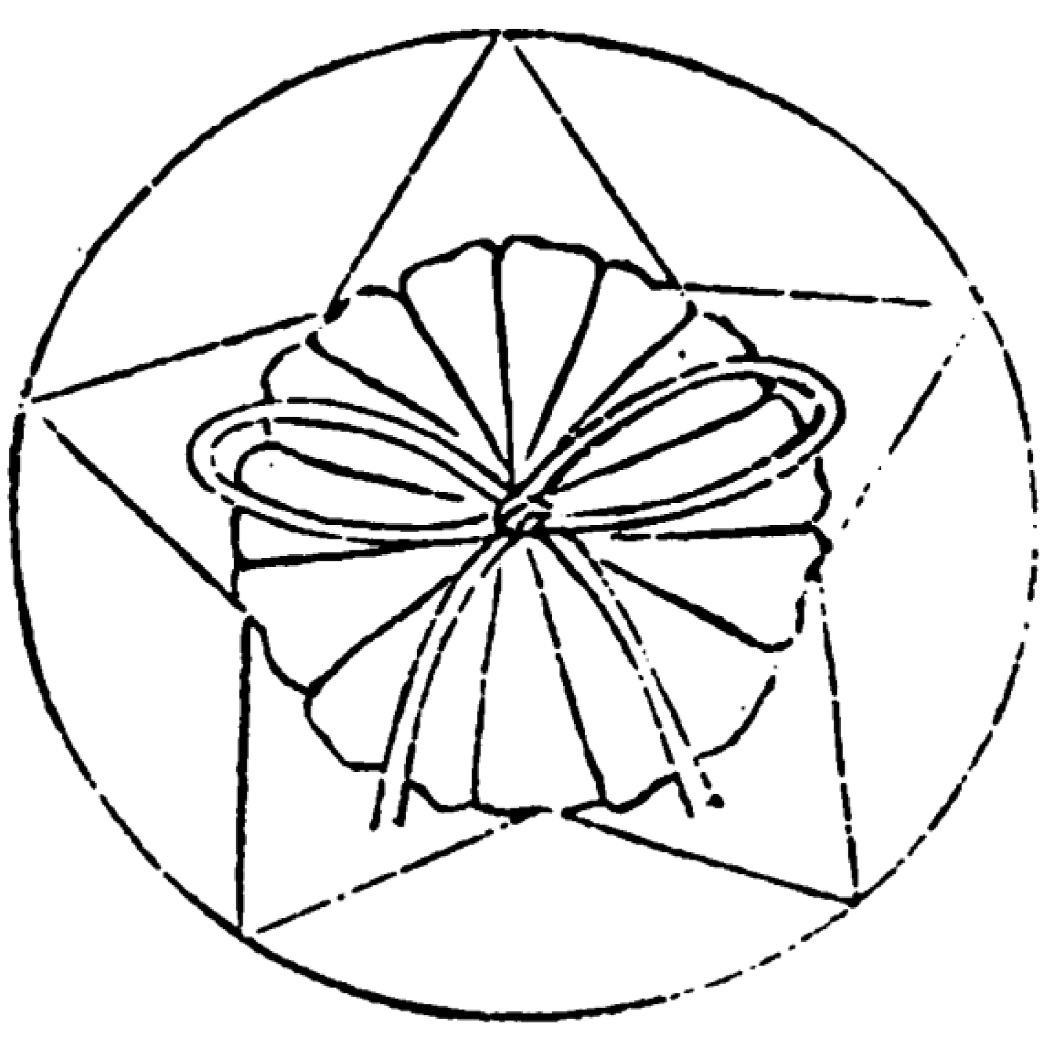




また、上圖の如く五片の切を、ぬひ合せ、それより又五片を同じやうにぬひつけ、其の三角に出でたる所を切りとり、其の口と、深さとをはかりて、其れと同じはどに裏の切れをぬか袋の如くたちて、縫ひ、底を、圖の如くに、兩角を眞中に合せて、とぢつけ、表の中にはめ入れて、よく合



その圖



（注意）中の三角のぬひ目は細くすべし。

せ、裏表の口を、しつけ糸にてとぢ合せ、口切を表の方にぬひつけ、紐糸をはさみ、或は後に通すもよし、さて裏にて絎けるを桔梗袋と云ふなり。

造花

伏見藤三郎

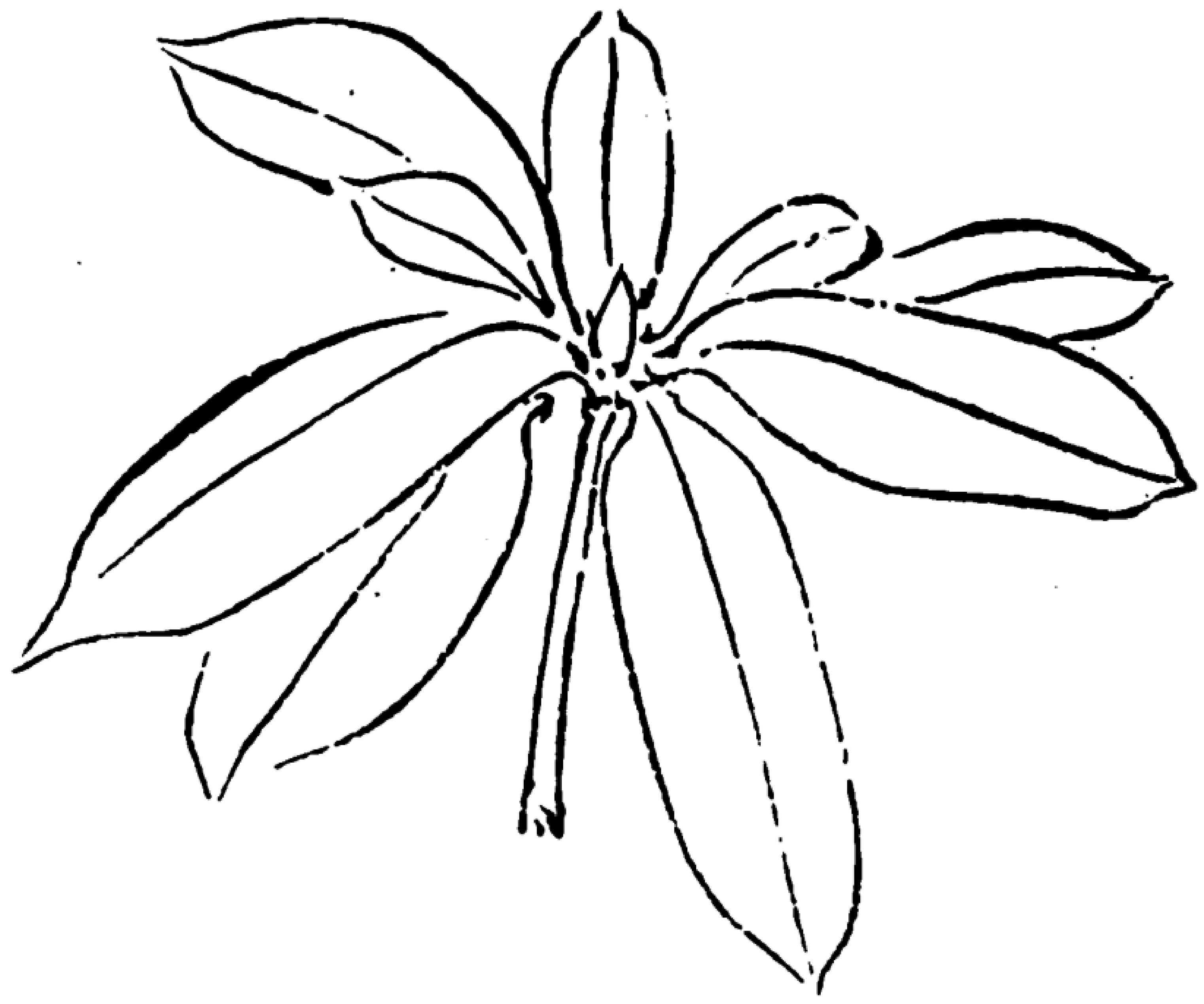
譲葉

又名、ゆづるは。樹の高さ五六尺、枝葉茂生す。葉の形、長く厚く、蔕赤し、舊葉春まで〻ありて、新葉生ひて後に落つ、相譲るに似たり。因て、新年の儀に此の葉を用ゐて、父子相譲る義に寄せて祝すなりと。

譲葉は、絖、羽二重、寒冷紗を用ゐ、表を絖とし、裏は羽二重、寒冷紗は眞となすなり。先づ表布（絖）を、「グリン」、「オウラミ」、「マセンダ」、前號菊朶と全じ合せかたにして染め。其の殘りの液にて、裏布（羽二重）を染む。何れも能く乾して、實物を取りて夫に合して形をつけ、形よりも一二分ばかり外を斷ち置き、寒冷紗も、全じく實物に合して形をつけ、形よりも一分ばかり内部を斷ちて小く造り置く。葉の眞中に入るゝ筋は、鉄の針金に美濃紙を卷き、先を小く元次第に太く一筋に造り、「マセンダ」にて赤く染め、之を、前に造りし寒冷紗に貼り付け、乾して后、此の筋の貼り付かざる方に、前に青く染め置きたる絖を貼りつけ、一度乾して、裏に、羽二重を貼り付け、さて后、廻りを形の通りに斷つべし。斯くすれど、寒冷紗は、表と裏との内部に包まれて緣に出でず、葉の恰好宜しきものなり。筋の處は、表よりピンセットにて裏の筋を狹みて表にも少し現はるゝ様にすべし。后、裏より、辨鏝にて、實物に見合して脹らみを付くべし。枝を造るには、中に竹の削

りたるを入れて、上は美濃紙を「カシトラズル」にて染めたるものにて巻き包むべし。第百十六圖參照

第百十六圖



だいどころ

パンケーキ

米利堅粉大匙三杯に、鷄卵一個の白蛋を投、水にて薄く能程にとき、「フライ」鍋に牛酪をひき、薄く焼き、其中に「ジャム」を入れて、包みて又「ジャム」を上よりかけて用ふるも宜し。

インヤンケーキ

牛酪半斤、砂糖一斤、鷄卵三個と、生姜を粉したるものと、桂子粉を茶匙一杯つゝ、玉蜀黍の粉一斤半、米利堅粉十五匁を混和し、好みの形に作り、鍋にて焼き、其冷たる後用ふべし。

ジョンネーケーキ

玉蜀黍の粉半斤と、牛酪十匁を湯にて能くこねまぜ、米利堅粉をとり粉にして、手にて好みの形になし、鍋に投れて焼、かへしながら両側より焼こと二十分間位にて宜し、焼たる後、冷めざるうちに、牛乳または糖蜜をかけて用ふべし。

ウヲツフルス

牛乳二合、鷄卵五個、牛酪十五匁を以て製るなり。先つ、牛酪をとかし、牛乳を沸し、其冷めたる時、鷄卵の黄蛋と白蛋とを分け、其黄蛋へ米利堅粉を交せ、どろ〳〵になし、牛乳の中へ投れ、又食鹽少量と、前の白蛋を投れて能く交せ合せ、フライ鍋にて燒べし。

アイリシユシードケーキ

新鮮しき牛酪三十匁と、砂糖半斤をよくねりませ、米利堅粉五十匁、鷄卵五個、干葡萄八匁、橙酢小匙一杯を投れて能く混和し、牛乳にてぬらしたる紙を燒鍋一面にはりて燒べし。





學園

秀歌集（十四）

鹽井正男

○

萠え出る木のめを見てもねをぞなく
　枯れにし枝の春を知らねば

○これは、後撰集の一の卷なる春歌の部にありて、兼覧王母のよめるなり。もと親しく馴れ通ひたる人が、其の後途絶えて訪ひも通はずなりたれぞ、庭の木の枯れたりける枝を折りて贈りやりて、途絶えを恨みやりたる詞なり。

○一首の意は、今は世の中は春に立ちかへりて、木

の芽は再び新しう萠ゑ出るやうに成りたり、されど、其の再び萠ゑ出でたる木の芽を見るにつけても、私は悲嘆の涙にかきくれまする、何となれば此の枯れたる枝は、最早春を知らずして、再び芽ざす事なき故にといひて、さて「枯れたる枝」に「途絶ゑたる人」をいはせ、彼方は最早私を思ひ捨てゝ、全く途絶ゑはてゝ、再びとふて下さるゝ事もなき故に、立ちかへる春に變らず萠ゑ出る木の芽を見ても、私は悲しう涙にかきくれて居りますると恨みやりたるなり。をもしろくもやさしくもいひたり。女子の心見ゑて、あはれさいはむ方なし。

○

かきくらし雪は降りつゝしかすがに
　わがやの園に鶯ぞ鳴く

○これも、仝集仝巻仝部にありて、讀人は知れず○かきくらし、空暗く曇りてといふことにて、雪の甚しくうち降るけしきなり。○雪はふりつゝ、雪は降りつゝありてといふことにて、雪は頻りに降りつ降りつして居りてといふ意にて感嘆の意こもれり。○しかすがに。しかしながらさすがにといふ意にて、萬葉集の九の卷に「風まじり雪は降りつゝしかすがに霞みたなびき春は來にけり」また、後拾遺集に思ふ人ありとなけれど故鄕はしかすがにこそ戀ひしかりけれ」とあるなどの「しかすがに」の類なり。

○一首の意は、空に暗く曇りて、雪は頻りに降りつ降りつして居て、マアー、併しながらさすがに、春に成りたれぱや、我が家の園に鶯が鳴くよといふことにて、なほ雪も降りながら鶯などもなく

寒き早春のけしきをよめるなるべし。

○

梅の花は盛りに成りぬらむ
　　　たのめし人の音づれもせぬ

○これも、仝集の仝卷なる春歌の部にありて、朱雀院の兵部卿のみこの御歌にて、その端書には、「あひ知りて侍りける人の家にまかれりけるに梅、の木侍りけり。此の花咲きなん時は、必ず消息せんといひけるを、音なく侍りければ」とあり。○たのめし人。あてにさせたる人といふ意にて、梅の咲きたる時には必ず消息して御招ぎ申さむといひて、いつか〳〵とあてにして待たせたる故に、しかいへるなり。○おとづれもせぬ。梅咲きたらむ、消息して招かんといひたるに、梅さきたる頃に成りても、消息せぬをいへるなり。

○一首の意は、兼ねて咲きたらむと約束したる梅の花は、今は最早咲いでたであらう、いつかいつかと、我れは、あてにして待ちて居りたるに、あてにさせた人は、何の消息もよこさぬ事よと嘆き恨みたるなり。

○

かへる雁雲路にまどふ聲すなり
　　　霞ふきとけこのめ春風

○これも、仝集の二の卷なる春歌の部にありて、讀人は知れず、題は歸へる雁音をきゝてよめるなり。○歸へる雁。故郷へ歸へり行く雁なり。○雲路。空を道に見立てたる詞にて、空の路といふ如き意なり。それを雲路といへるは、空は雲の在る所なればなり。なほ「海路」を「浪ぢ」などいふも、これと仝じやうなる詞づかひなり。○聲すなり。聲が

するワイと感歎せる詞なり。此の「なり」は、感動の意をあらはす「なり」なり。斷定の意をあらはは す「なり」にはあらず。若「聲するなり」とある時は「聲するぞ」といふやうに、「なり」は斷定の意になるなり。○このめはる風。木の芽の出ることを、はるといふことあり木の芽のはるといふはると、春のはると、全音なる縁によりて、ひきかけて、はる風の序として、このめといふことを用ひたるなり。特に木の芽のはる春風といふやうなる意にはあらず。このめは單にはる風といひ出づる序と見るべし。○まどふ。迷ふに全じ。

○一首の意は、故郷へ歸り行く雁がねが空の路に行き迷うて鳴く聲がきこゆるワイ。春風よ、霞を吹きて、立ちこめたる空の霞をといてくれよと春風にたのみたるにて、霞の深く立ちこたる空に、雁がねの聲のきこゑたるけしきなり。何となうおもしろき歌のさまなり。

○

君來ずて年はくれにき立ちかへり
　春さへ今日に成りにけるかな

○これも、全じ後撰集の三の卷なる春歌の部にありて、藤原の雅正が、常に親しう訪ひ來れる紀貫之の、さはる事ありて、久しく訪づれず、あはずして年もくれにき。あくる春彌生の晦日にかくよみて、貫之の許に贈れるなり。○君こずて。貴方が來たらずしてといふことにて、「君」とは貫之をさせるなり。○春さへ。あはずして年も暮れたる上に、春も、またあはずしてといふことなり。

○一首の意は、貴方が來たらずして、貴方に逢はずして、去年は空しく暮れてしまつた、新しき

春に立ちかへりたれど、なほ遇ふ事は出來ずして、春も、また、終りといふ今日に成つてしまつたワイと久しく遇はぬをなげきたるなり。感情ふかくしてもりて、あはれに身にしむ。

○

をしめども春のかぎりのけふの又
夕ぐれにさへなりにけるかな

○これも仝じ所にありて、讀人は知れず。○此の歌は伊勢物語にもありて、それには、「けふの又」といふ第三句は、「けふの日の」とあり。その方、反て、この「けふの又」といへるよりは、調べつまらずして、ゆるやかにてよし。とればゆ。「けふの又」といひたる方は、やゝ語勢強くなれるやうなれど調べのゆきつまりたる所さゝよからず。

○一首の意は、惜しめども、惜しめども、春は更に留まる事なくして、いつかはやくすぎゆきてはや春のはての日の今日ともなり、其の今日もまたすぎゆきて、既に夕暮にまで成つてしまつたワイ。誠に名ごりをしゝとながめたるなり。前の歌と仝じやうに感情ふかくこもりて、いかにかりなくあはれむなり。

ふゝくろ入添

下田義天類評論

原文縣居翁の作

ふゝくろは、其の始に附言したるが如く縣居翁の消息文百餘篇を収めたるものなり。既に其の十三篇は、管見を記附して讀者諸君に紹介したり。此の外にも、猶いと多かれど、歌論にかゝれるものは少し。遺れるものは、むけにかいなての輩へ

さとしたるを、あだしことを云ひ遂られたるとなり。されど、それらは暫さしおきて、ふところ以外に、翁の歌論の散在せるものを、この序に入れ添ふることゝすべし。左に掲ぐるものは、翁の彦根の龍公美ぬしへ贈られたる書簡なり。公美は草蘆といひ、漢學を以ちて世に聞えたる人なり。與へられたる人既に一家の學者なり。其の論また平凡の言に非ざることを察すべし。此の原書は、今宇が井純素といふ人の所藏に係れりといふ。但轉倒訓にすべき所は、今改めてかきくだしとしたり。

第十四

猶多事にと筆を走らせ打かへして見ることも侍らでまゐるなり。

彌御多福恭陽御迎へ成され候はむと歡察いたし候ふ。小家無事なり。然れど去冬以來預示數度の慮御答も申さず殊に去初秋御丁寧に仰聞けられ候ふ以後も甚多事にて失禮に及び候ふ。

最前遣はされ候ふ御問一冊はいともはやく認め置き候ふを書狀調候ふ間これ無く且は御察しのごとく皇朝之大政之主意より始めて物學ひの本意異國とは甚異に候ふを異國の學或は後世の歌等の御舊習よりして御論じ等御座候ひては一向相うつらぬ事故に自然に御答も懶く候ひて延引に及び候ふ也御容恕下さるべく候ふ。

返書遲延の解說中に、先以ちて彼の根據となる漢風を說破し、合せて後世歌學者の俗習を論破して徐に自己の宿論を吐露せむとす。其の用意の周到なることも以ちて伺ふべし。

されど、此の論、ひとり龍草蘆その人の爲にのみ

云ひしに非ず。これまた翁が平生の御持論なり。今の歌道を論ずる人にも、亦以ちて一顧すべき御訓示なり。等閑に見過すべき所に非ざるなり。

向來も猶御問成さる可き思食に候はゞ最前より小子申進し候ふ筋を以ちて御主意を改められ候ひ而御問も候はゞ御報仕る可く候ふ。

道同からざれば相共にはからず。根底よりその着眼を異にしたる者へは、何事を云ひても甲斐なかるべし。故にこの言あり。

偖今日の歌學界を見來れば、五七の調子と、七五の口くせとを比較し、これが天然なり、かれが自然なりといひのゝしり、その七五の口くせは印度亡國の音に感染したるものなりと云ふ。先覺者のいましめを忘れ、和讃今様等が中古の人心を蠱惑したる事實をも顧視ず、その甚しきは、歌と謡ひものとを混同し、謡ひものと語り物とをまで混同して、正邪雅俗のけぢめを打捨て、浮れぶし、阿房陀羅經は萬人を感化する力あり。其の言も自由にて且斬新なり。長唄、淨瑠璃は耳遠し。其の言も束縛する所ありて、且陳腐なり。と、自己の聽き慣れたるものゝみをよしとして、俗習の數奇不數奇を直にとりて、正雅の歌曲を正す標準に適用せむとする徒さへありて、遂に大哥所へ新体詩とか云ふものを持込まむとするものまで出で來るに至りたるは言語同斷あさましと云ふも餘りありと慷慨するものあり。此の論餘り極端に走り過ぎたるものなる可けれど『七五の調子は佛經の偈讃より感染したりと云ふ　伴友信が議論も』『神代以來の俗謡は七五の口調多しと云へる　松浦道輔の考證も』共に世人に忘れられて今日の歌學界に顯れ

來ぬ妻なるは甚不思儀といふべきか。ダンテとかカントとか云ふ人の詩論も知らず。セークスピヤの詩形をも聞きしことなき余輩には、比較の上の考按も立ち難けれど、其の當然の歌論は所詮我々のうかゞひしる所に非らざれども、これらの議論をのみ金城鐵壁として、我が國風を論斷せむとするもの丶日に月に増加する傾あるは、畢竟余輩とは其の根底より着眼を異にせる人々なるべし。この人々に向ひて、己が歌道の正學を論せんとするは、勞して功なき無駄骨折に屬すべけれど、翁の此の論また我々正學を重ずるもの丶心得置く可き所なる可し。

皇朝之古意は神代より始めて武を以て標とし和を以ちて内とし迮細なる事を少しも言はず。民を强ひず正さずして天地にかなへて治め給ひし故に古は天皇益尊く世治りしを異朝の人の作りたる道を用ゐ給ひしより宮殿衣服禮式等は宜しく成りて天下は漸々亂れ行き 天皇衰へ給へり。此の意をも萬葉の歌を數年よく見候へば古人の心直きを知るその直きを以ちて推すに天下古今に通せざる事なし。

字々皆肺肝よりいでゝ言々皆精神なり。謹みて猥りに卑見を加へず。讀者こふ熟讀せられんことを。

哥は心慰なるものと思ふは今京以下の哥の事なり。古人は心情を隱さず一意によみ出で侍れ此の書に遊ぶにつけて古へやうしらる。後世國學者流皆此の意を知らぬは此の國はやはらぎたるを專とすと思へり。

歌は花鳥風月にのみ呻吟する世外離俗の翫弄物に非ずとは、貫之以來人々の口にする所なり。これ

を口にする者は多しと雖もこれを實にせし者は蓋多からざるべし。荷田の春滿翁一度これを實にせむとしてより、この翁もまた其の遺志を繼ぎて、熱心に世道人心を感化す可き要具とせむと努められたり。故に、其の眞心を謌ひて、浮華虛飾の風を撓め、謂はゆる巧言令色を排して、朴訥剛直のものを歡迎せらる。其の古人の歌を見るにも、亦常にこの意を以ちてこれを見られたり。故に、よく古人の心を洞察するに至れり、能く古人の心を知りて、然して后、この斷言あり。僅に其の一偶を見て全体を臆斷せむとする類には非らざるなり。さて、後世の國學者とは爰には誰等を指したるものならむか。彼の陰樹一派の俳偕歌人は、當時未世に出ざりし時代なり、貞德季吟茂睡長伯等の流亞を云へるものならむか。翁の眼中にはこれらの人をとゞめたりとも思はれず、思ふに、今少し古き人になるべきか。

定家卿の衣笠内大臣に進せられたる書中に、先歌はたゞ和國の風にて侍るうへは、先哲も、くれ〲いひ〱置ける物にも、やさしく物あはれによむ可き事とぞ見え侍る。げに、いかに怖しき物なりとも、歌によみつれば優に聞なさるゝたぐひぞ侍る其に、素よりやさしき花よ月よなどやうの物を、おそろしげによめらむは何の詮か侍らむ。

と論じ、また、

寂蓮がいへることなりとて、

かるもかくふす猪のなどいへど、あらけなきゐのしゝなどいふ物も、やはらぎうつくしく聞ゆ。

といへる詞を、家々の抄物に書き傳へて金科玉條のごとくに云へるなどを思ふに、蓋これらの人々

をさしたるものなるべし。すべて平安京以來は、朝野文弱に流れて、堂々たる男子が、齒を染め、眉を畫きて歡びにし世なれど、女流の口眞似してたけきこと〻心得たる者も多かりし時代なり。この頃、歌も一段の全盛を極めたるが故にこれらの歌をのみ見ならひ聞ならひて　遂にその女々しき風体を歌の本領なるがごとくに僻こ〻ろ得して、右のごとき誤を世上に貽すには至りしもの也。翁のこ〻に後世の國學者といへるは、うつなくての流の人々をさせるものとぞ思はる〻。同じ世にも彼の鎌倉の右大臣が大丈夫の風を讀みきりたるまた　順徳院天皇の八雲御抄に、只艶ならずと云ふとも心をたしかによむべし、返々やさしきをこのむ可らず。と宣へるなどを思ふに、早くより其の非を鳴らしたる人々もありしなるべし。公任經信などの諸卿にも、これと似よりたる論あり。基俊の歌にも、亦丈夫風のものましれり。翁の論蓋これ等を見渡して、この一大斷案をも下し〻ものなるべし。

この原文猶長し。云ふ可きことも亦多し餘り場ふさぎになりぬべけれど、以下は次號に讓らむ。



漫録

主從心得草（承前）

諏訪忠元寄贈

落穗草にいわく、

御明君被仰候は、惣じて、大名の道中をするに、雨具を持たる中間共の悦び候樣なる仕置はせぬも

のなり。老中共心得置べき事なり。と、御意遊され候となり。是又入用の事にして、心得あるべし。慈悲たるれど、はなたれる。とやらの世話の如し。下部は天性愚鈍にして、己が仕方のわろきをしらず、只人を恨む、何程よき事をしてつかはしても、その大恩をしらず、骨折働く事をいやがり、うまい物をたべて寝ることを好む、世界の穀つぶしともいふべし。是、足る事をしらぬといふ者なり。上に立君子は、其所を合點して、生さす殺さず、中をとりて使ふべし。是等の鹽梅は、楠正成の使ひやう、又乍恐、御明君ならではかなひ難し。智を以て是をたゞし、仁を以て人をなづけ、勇を以て是を行ひ給ふ。智仁勇の三德備わつて、天地にならびなき神將也。智になつまず、仁になつまず、勇になつまず、中和をて行ひ給ふ、是に從ふ者は繁榮なり。是に逆ふ者は忽滅亡に及ぶ。良禽は木をゑらび、良臣は主をゑらぶ、とは尤の事なり。とかく主は慈悲を第一とし、臣は忠をはげむべし。何れ中庸の心がけあるべし。

拙ひそかに思ふ、楠、眞田といへども、あまり忠義に淫かとうたかふ、古語にいわく、仁過れば勇を失ひ、義過れど愚癡になるとあり。合せ思ふ、又孔孟の心によれど、官祿を辭し去べき歟、片桐を用ゐざる程の愚、何ぞ眞田が胸中をしらむや。必勝の利なくんば、無益の戰ともいふべきか、又至忠は如此するものか、その是非をしらず。君子の人我が迷ひをはらせ。

兵書にいはく、君の職三ツ、才を謀りて官を授け、功を計りて賞を加へ、罪を明らかにして罰を行ふ。又官に置に、其の才の長短高下あり、賞を行ひ其の錄

を授るにも高下あり、夫々に宛行ひて、恨みなき樣にすべし、功を吟味し、其の功に當る事は、只詞より其の祿を以て報ずへきなり。功に上下あり。故に、賞に上下あり、貴賤皆同じ。尤、大名、旗本、今日の下郎も、其の賞は其の身の功相應にすべき事専要也。人に功有て賞なき時は、士卒大ひに倦疲るといへり。是を忘れ。是を心得よ。

又人の家尻を切、強盗なすを盜人と斗りいふにもあらず。只うはべには正直と見せ、口には嘉言をはき內證にては主人の物を掠取、私曲佞奸にして下を貪り、上下の間の病根となる、我に賄賂する人を贔負加擯して、我に疎きを罰するは役人の大罪なり。此間を吟味して紛れさるようにすべき事第一なり。此の三ッのものは大切にして愼むべき事なり。此の賞罰に明白なるは御明君なり、明鏡の如し。善人を擧惡人を押ゆる事上に立人の職分なり。兎角賢人を擧用ゐざれは、國空虛して、あやうき事累卵の如し、孟子(盡心下)にも、仁賢を信せざれは、國空虛なり。禮義なき時は、上下亂るゝ。とあり。主人たる者心を用ゆべきの専一なり。舜は皐陶を擧、湯は伊尹を擧、武王は臣十人ありて天下平かなり。又論語にも、直なるものを引擧て用ゐ、枉れる者をは捨惜べし。若し枉れる者を引あげ用ゆれは、民服せずして、何れ惡事を引出す者なり。必もちゆべからず。惡人は邦家を亂す物ゆゑ、これをしりぞけ遠ざくべし。(以下次號)

千代の家土產（續）

金津常十郎

我そりかへれむ、人もいかりてそりかへり、我うつ

むけは、人もよろこびて頭をさぐるなり。古語にも行得ざる時は、反て我身にもとめよ。と、むべなるかな。子は父母に頭をさげ、家來は主人に頭をさげ、妻は夫に頭をさげ、弟は兄に頭をさげ、朋友互に禮讓あつく、頭をさげ合ひて、身をへりくだり、士農工商共に分相應に頭をさげ、身をほこらず、へりくだる時は、自然と天の惠みを得て、子孫目出度出世するなり、天道はとかくみてるをかき賜ふ。十五夜の滿月の、十六夜より闕けはじむるも、普世の人への御さとしなり。かけ給ふ故に、又十分に滿ちたまふ。

誰もみよみつればやがてかけそめて
いざよふ月や人の世の中

此のいざよふ空の、誠に人の世の中のさまなる事を知りて、愼むべきことなり。むかし語りに、都にちかき八瀬の里の邊に、うるはしき女あり、美目姿のみきよきにあらず、糸竹の曲にもたくみなりしかど大内のやんごとなき御方よりも、常にめされ、又町家の富裕のものも、是をまねぎて、愛すといへども、此の女とかく暫の間に、人にあき嫌忌はれては、家に歸り、おもふまゝに、身を立つることあたはざりしが、或秋の夕がたに、默然として、おもひけるは、我かゝるよき美目姿を持ち、ことに糸竹に妙ありながら、かく淋しく、身をも得たてずして、くらすなるは、いかなる因果因緣なるぞと、かなしくてなげきし折ふし、ふと庭の邊なる稻の、ゆたかに、十分實のりて、うつむきしをみて、おもはず知らず、横手を打ち、げにあやまちたり。あやまちたり。昔ひとの言の葉にも、人みのるときは、あふむき、稻實のるときは、うつむくと申せしぞや。すべて世の中に、いかなる山海の美味美食にても、日夜食せど、あ

き果る物なるべし、然るに、稲は日々夜々に食し、貴賤老若ともに用ゐて、悦び侍るは、稲の徳なり、其徳は己が實が入れど、入るにしたがひて、只うつむきて、へりくだり、少しもほこりあふむかざる故にこそ、世の寶とぞなる物なれ。我が人にいみきらはるゝは、全く我知らず、我が姿にほこり、藝にほこり、只うつむかずほこる故なりと、初めて悟り、悟道して、此より我が名を稲とあらため、人のほむれど、猶々以て、愼みて頭をさげ、人のそしれど、ます〳〵以て頭をさげ、只謙遜を守り、萬に身をぞへりくだりしかど、世の人愛して大に榮ゑ、子孫目出たく出世せしとかや、特に女は、猶以て身をへりくだり、しうと、姑、父、母、夫に順ひ、少しも巳が意を用ゐず、愼むべし。中京の或富家の妻に、松といひし女ありしが、美目姿は勝れざりしかども、其の心ざま貞節柔順にして、みさを正しかりける、此の夫富家のくせにや、常に大酒を好み、手にも足にもわたり次第に、女色をむさぼり、様々のみだりごと多しといへども、此の妻少しもりんきへんしうの心なく、ます〳〵にうわに貞節なりしかど、此の夫せめて一度は、此の妻にやきもちをやかせ見ばやと、りんきすべきやうにざま〳〵の惡作をなせども、此の妻悋氣は更なり、少しの腹をも立ざりしかど、夫、或時、我が妻の、とても、りんきはなさずとも、せめて一度は腹をだに立てさすべしと、大酒せしを幸に、一首の落首に大惡口を書きて、あたへしは、

やきもちはやかねど顔のくすぼりて
色はまつくろ尻はでつくり

此の狂歌、我が妻なる人の、御姿を正うつしによみて遣し侍る、早々御返歌給はるべし。とかいつけて

悪さげにあたへしを、妻の松女おしいたゞき、くり返しよみて、はづかしながらと、此の返歌に、

ありがたや姿のみにてはづかしき
心の沙汰をつゝみ給ふは

心をは鏡にうつし見給はゞ
すがたにまさり見にくからまし

とよみて、おくりけるに、此の夫是をよみみて、酒の酔を一時にさまし、感涙に袖をぬらし、我十分に悪口をいひしに、妻は反りてよきにさとり、夫なれどこそ、わがみにくき姿のみをそしり給ひて、其の姿にまさりてみにくき我心の事をつゝみかくし給ふは、扨も〳〵有難や、夫なれどこそ、との此の言の葉、かかる謙遜の貞女世にあらんやと、是より身持をあらため、只余念なく此の松女と、千代のちぎりいとむつまじく、萬代々々まで榮ねしとなり。世の女たる人は、此の松女をば手本となし、かりにも、りんきやきもちに身をこがし給ふべからず。

おろかるしんゐのほのほふりたてゝ
我とむかふる火の車かな

此の火の車も、地獄も、皆々われと向へこしらへる事なるぞ、とにもかくにも、女たる人の第一の愼みは、りんきへんしうと、我にほこりいでる事なり。昔より我にほこるものはほろび、我をつたなしと愼むものは榮ゆるなり。或深山に、一疋の鹿ありしが、常に、熊や猪と交るに、己が足のほそくして、猪熊におとれるを恥ぢ、身をへりくだりて、愼みしかば、猪熊も鹿を愛し、食などをあたへ、また狼來れば、是を追ひしりぞけやりて、懇なりけるに、此の鹿あるときに、ふと谷川の水に己が姿をうつし見て、我ながらも扨も〳〵世に見殊なるうるはしき、二の角

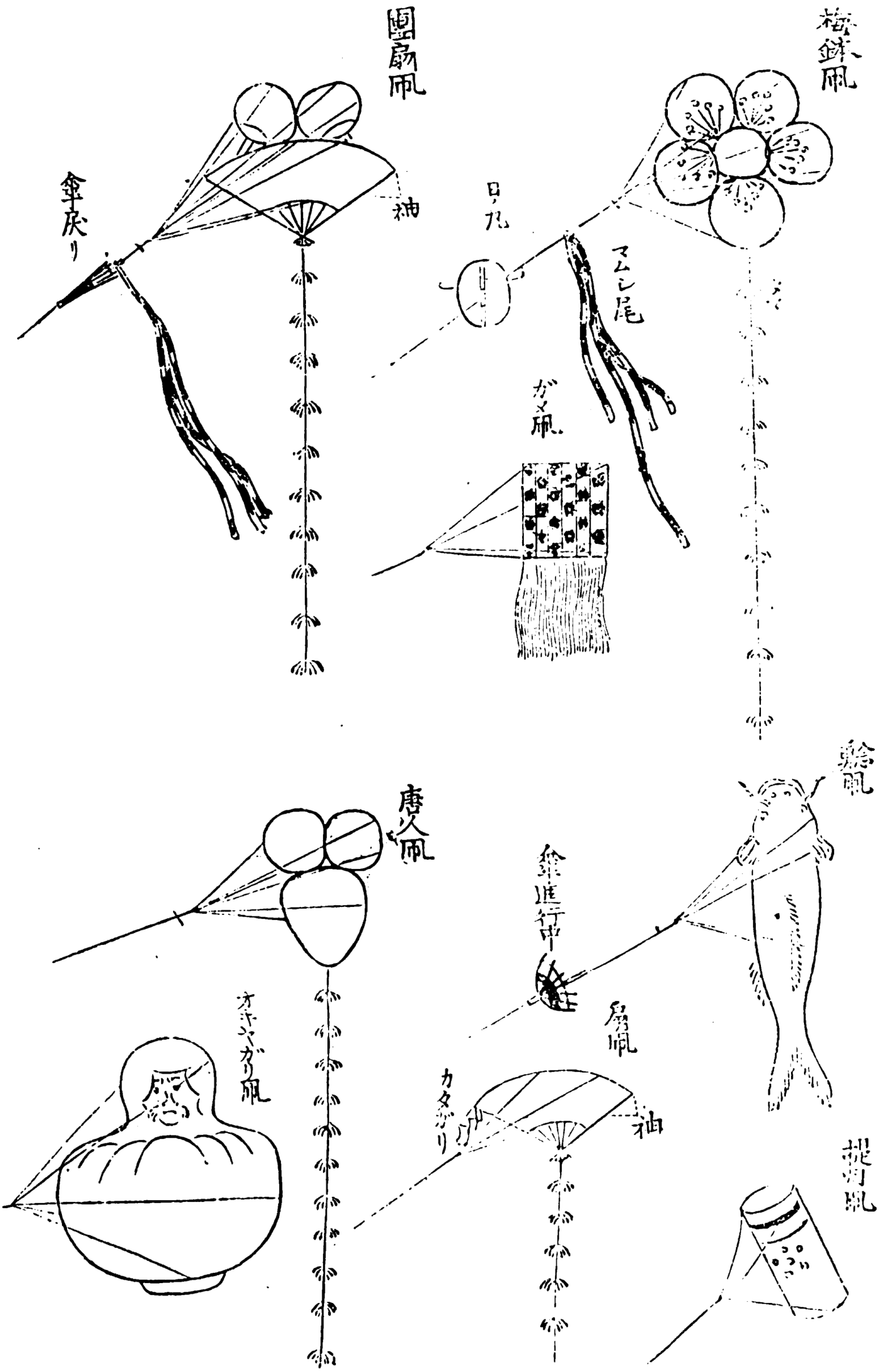
あり。かゝる見殊の角ある獸の、他にあらんや。然るに、我は此の角あるを知らで、只つたなき細き足のみを恥ぢて、猪熊にしたがひしぞおろかなる。今よりは此の角を以て、猪熊の上に立つべし。と、心大きにほこり、此の後は、猪熊に出會ふ度ごとに、角をふり立てゝ、ほこりければ、猪熊いかりて、此の鹿を忽ちくらひころせしとなん世の中、皆々この通りにて、我が能を能とすれば、其の能をうしなひ、我つたなきをつたなきとすれど、人反て是を愛するなり。何事も、愚を守りて、只々うつむきへりくだるべし、世の中に、何にほこり何にたのまんや。鶴の足の長きとて、時によりては反りてあしく鴨の脛のみじかきも。時にとりては大きに益あり。何れも一得あり、また何れも一失あり。何れも是なり、何れも不是なり。

いかのぼり

井上頼文

紙老鴟の昔はとはず、烏賊幟の故實はいはず、たゞ、此のいかのぼりが、春陽上升の氣に乘じて、空中に翱翔し、兒童の眼目を娯ましめ、自體の營養を與ふる功の大なるを記してん。此の遊びの有益なること、はた、其の製作方の吾人が意に合ひて、最も同情を表せるは、

小兒必要記に曰く、續博物志といふ書に、春の時に、紙鳶を作りて、風にふかせ、小兒の戯れとなさしむる事は、兒をして、空にむかひて、氣をはき、風にふかれて、熱をもらさしめんとの意なり、と見えたり。紙鳶とは、日本いふ所のいかのぼりの事なり。本邦にても、多く兒に此遊戯をなさしむる事なり。此の俗は、其の意をさとらず、奢を

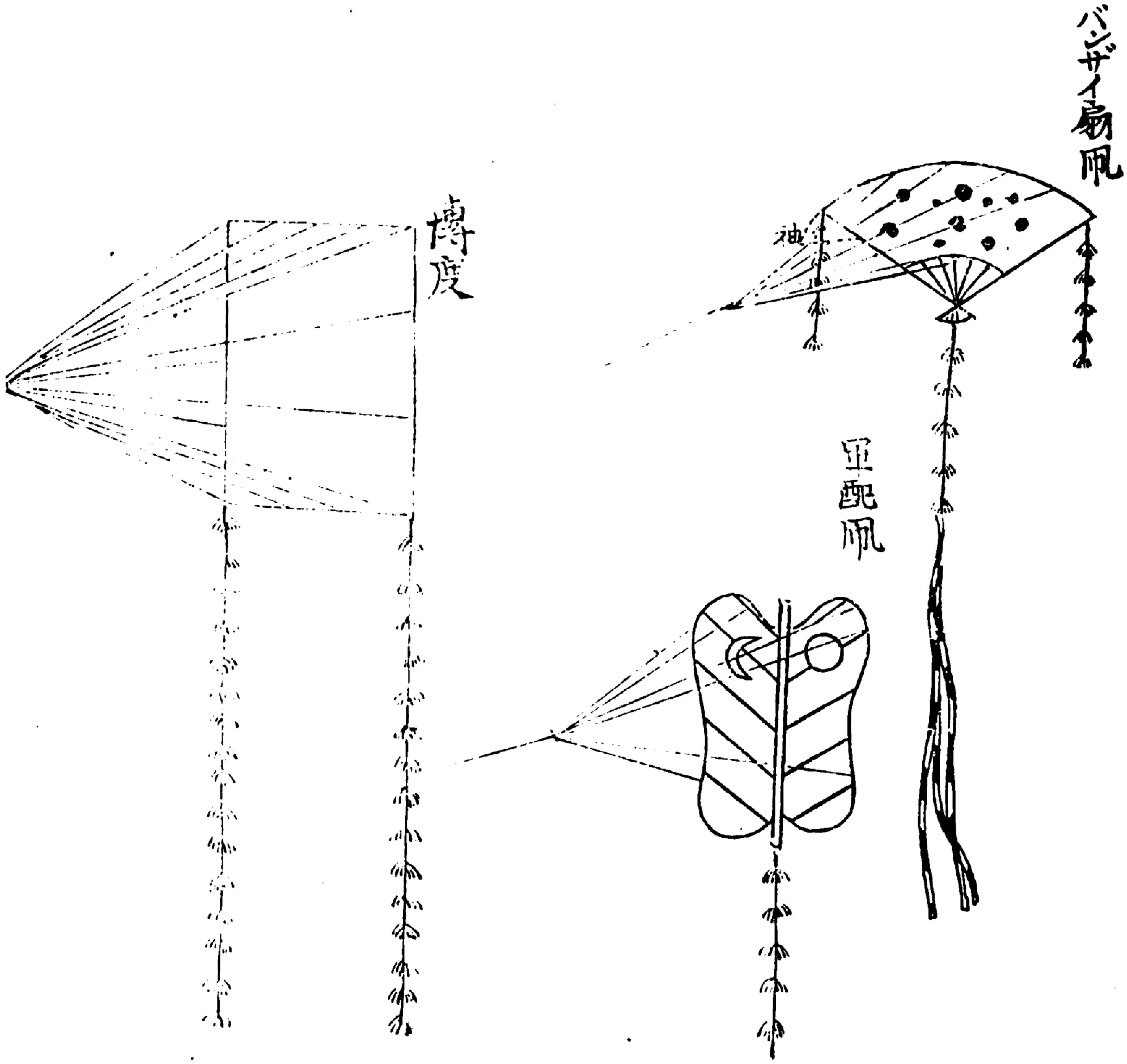

梅鉢凧
團扇凧
袖
傘戻り
マムシ尾
唐人凧
扇凧
カタぶり
袖

のみ好み、紙鳶を作るに、其の大さ五六尺ばかりにして、金銀をちりばめ、糸を長くつけて、健なる男に揚させて、たゞ人の目をよろこばしむる事のみにして、財を費すのみにあらず、其の益なし。紙鳶の戯をなさしめんとおもはゞ、そのかたちをちいさく作り、小兒、みづから風にむかひて、吹きあげさせ、空を見て、氣をはき、熱をもらし、かけ廻りて歩行おのづから健になる事をしるべし。能々心得べき事なり。

とあるぞ、おもしろき説なりける。

先つ年、北村信彌氏にきゝけるは、加賀國、金澤にては、少さき紙鳶をつくりて、毎年三月二十三日、郊野にいでゝ飛揚せしむる事あり。老若男女うちつらなりて、各酒肴など携へ、緑野の青草を踏みつゝ、うらゝかなる空中に、さながら、花紅葉をこきまぜたらんやうに、うるはしきいかのぼりを揚げたるは、ことなきたのしみなり。いづこにてもすれど、わけて二俣といふ處ぞさかりなる。二俣は、金澤の城下より、三里ほどへだゝりたる處なりと。おのれ、其の紙鳶の製作方を尋ねたれど、信彌ぬし、自らゑがきて、送られぬ。此のつくり方は、兒童のもてあそぶに適せりと覺ゆれど、こゝにかゝぐ。

因に云ふ、信彌ぬしは、陸軍二等看護長を奉職して、勤勉篤實の人にてありき。おのれが、この紙鳶の圖ゑがきてよ、兒童の体育にふさはしき遊具なればと乞ひければ、ぬしのいはるゝやうは、おのれ、繪圖を學びたる事なし、公務の餘閑に、つくね薯の如き山嶽巖石の狀などはゑがけど、かゝる圖はつくり得べくもあらず、されど、兒童の健康となるべきわざならば、强ひてもかき試みてん



とて承けひかれぬ。ある日、雪いといたく降りて、寒さ堪へ難き夕つかた、おのがふせ屋、おとづるゝ人あり。誰ぞと見れど、彼の北村ぬしなりき。この寒き日に、よくこそといへど、市谷師官學校より退出後、直に家に歸らんと思ひしが、年內餘日もあらず雪ふりにて、道あし。長き堀ばたは、風寒し、などいひて、遲れなど、あしかりなんとて、來つるなり。こよひ來つるは、他にあらず、過日あとらへられし、彼の紙鳶の畫樣のことなり。新年には、此の圖の中にて、心にかなひたるを示されよ、つくり試みてん。實は郵便に託せんと思ひつれど、圖の拙劣なれど、

説明なくては、とて携へ來つるなり。まづは、此の事申さんとてなり。いざ、御いとま、といふいふ靴をうがたれぬ。いと、寒し、酒ひとつと、留むれど、耳にも入れず、としよりの夜道は、とざれどみつゝ降りつもれる深雪蹶たてゝ走りいでられぬ。せめては、冷酒なりとゝ、れのれ、直にコップにつぎ、こばさじとつかみながら、あと追ひかけしに、ぬしの姿は、はや白雪にまがひて、見えずなりにき。かゝる勤勉の人は、世に多からざるべし。むべなるかな、在職中父兄の如くしたはれしこと。

詠歌大意

此の詠歌大意てふものは、清水谷大納言實業卿より、僧釣月に敎へ授けられ、釣月之を平井寛敬に傳へ、寛敬また小泉眞種（雲州松江藩番頭家祿四百石に）傳授せしものを、余先つ年、松江に僑寓せし時、小泉氏より借受寫し置たるを、這般諸姉達の學の道の指南車にもなれかしと、更に短評を加へて貴社に寄す、希はくは、女鑑に載られんことを、

吉田久胤

咏歌要意

第一。よく聞ゆるやうにと詠ずる事第一に候。聞ねず候へども、稽古あがるべきよふ無之候。思ひよりたる心を、明らかに聞ねて、よろしき樣にと詠ずる時、さやうに詠成就しにくゝ候、其處に向て、工夫稽古を加へ、鍛錬の功をなし候へども、一際あがる事にて候。

第二。能聞ねて後、此心よきかわしきか、優美なるか卑劣なるかと、吟味する事に候。さて入はかなる（原文ノマヽ）

心、過分なる心、恰好に不相應なる心あらば、除き捨る事なり。

○評に云（さて人はかなる心」とあるは、想ふ應に「扨又題の外なる心」の誤脱なるべし。

第三。句の吟味に候。のびたる句ばかりつゝけたるは詠しはなく、ながく成候、せはしなき句のつゞきたるは、歌くだけてせはしく候、尤可ㇾ有ニ吟味ㇾ鍛鍊候、近き頃　新院御會に

山家鳥　七條羽林隆脩

庵ちかみ松吹あらし鳥のこゑ
　みやこにかはる山のおくかな

右の歌を　法皇の仰に、松吹嵐鳥の聲とあらば、都にも似ぬと四句あるべし、又四句に、都にかはるとあらば、二三句松のあらしも鳥の音もと有べしとなり。

○評に云　法皇乃御批評し給ひしを、一目瞭然たらしむれば左のごとし。

庵ちかみまつふく嵐とりの聲
　都にも似ぬやまの奥哉

又

庵近みまつのあらしもとりの音も
　みやこに替るやまの奥かな

（以下次號）

北の海路

石榑千亦

第二信

十月八日午前六時四十五分發の汽車にて、青森に向ふ。山のたゝずまひ、川のながれ、思ふに仙臺より南にくらぶれば、いたくまされるものあらむ。さても口をしきは、今日も雨のために、あたりをぐらくし

て、さだかに、はた、つはらに、その風景を見ることを得ぬことに候。窓をうつ音のはげしさいはむかたなけれど、**そはしのびてもあるべし。其實こそ、い**とも憎く思はれ候へ。そをいかにといふに、玻璃の透明を奪ひて、見れども〳〵、我面のほのかにうつるのみにて、あたりのけしきは、つゆ見るべくも候はねどなり。明けんか、いみじく吹きすさびて、しのぶべくも候はず。あはれ、雨の道をゆくは、いかに苦しからむ。されど、汽車の旅も、雨は大の禁物に候。殊に青森縣に入り、海ちかきわたり、雨にまぎれぬ波の音ぞきゝて、そゞろになつかしく、窓ひき下して、幾たびか顔もしとゞに濡れ候。海邊なれむにやと、ふさはしくも思はれ候ふは、いかにひがめる心ならむと、吾ながらをかしうもなり候。かゝる中にも、今日は一人の少女子を携へて、東京より函館に歸へらむとする某氏と室を仝うじたるは、まことに幸にて候ひき。そは水産上のこと、土**地のことは、其人の過去の職として、現在の業と**して、談はれしのみならず、北海道におけるアイヌのさま、所謂シヤモのさまあるは、見聞よりなれる西國のこと北陸のこと、皆未聞のことゝて、面白う思はれ候。これなむわが爲には、救ひ主に候ふなる。其人に誘はれて、旅宿のことも汽船のことも便を得たるは、いたく其好意を謝する所に候。

さても某の君も、今宵ともに船にものすべく契りしに、まことにはかるべからぬは天候にて、青森なる旅館鹽谷に着きし頃は、いたく風だちて、雨さへふりまさり、なほいやましに荒れすさびなむとするに、婦人をともなへる君は、いたく危ぶみ、遂に明日の夜をまつべく思ひ定められ候。隣の室にも、又その

隣にも、こよひはやめむ、一日をあだに過さむ、金子にはかへられずと、いふが聞え候。われは一たびはやめむかとも思ひつれど、十日の日までは、札幌にものせむには、今宵こゝにとまることを許さず。伯の君はまち給ふらむに、船出でずとならむ、天のこと。こよひはあれむの恐れをもて、さしひかふるは、たゞ安きことをのみ希ふやうにて、盡したりとはいはれど。紀州の海、遠州の洋、近き頃一たびあれにあひたり、今一たび北海の風波にあはむも、又壯んならずといふべからず。いでやわれ一人たゝむといへど、君も驚き、宿にも驚き、暗に無分別をとゞめいさむる如き語氣あれど、引かへさむには、引かへさむまで、船のゆかむ限は、豈われ一人のみかはとて、遂に出立ち候。

篠をつくが如き雨、面をうつが如き風、棧橋と通船との間にて、水につけられたる鼠のやうになり候。まして船の動揺甚しく、折々からき水さへ、打かぶり候ふをや。まことに無分別なりけむと、吾も思はぬにも候はざりき。されど、わが如き人は、なきにしも候はず。わがのりしは、敦賀丸とて、七百噸ばかりの船なり。定めの室に入り、上衣などぬぎて坐を占むれど、事務長ならむ、仝じ椅子に尻打すゑて、何くれと談らふ。見たまへ、錨うてるに、かばかり動揺せり。こよひは酔ふを覺悟にてなどいふに、驚かぬにもあらねど、今は心おちゐて、いかばかりはげしくあることならむとおもひつゝ、なほ聊かにても靜かなれかしと、女々しうも心には祈らぬにもあらず候。

紅茶などものしてある間に、十時も過ぎければ、わが室なる臥床に入り候。船はゆるぎいで、錨あげし

ではしりつれど、其後はたゞ夢のみ。如何にふきあれけむ、いかにふりすさびけむ、露しらす候。九日れきいでゝ見れど、たゞれける荷物の、やゝ處をかへしのみ。雨はれ風なぎて、雲のちぎれ〳〵なる東の空に、旭日やう〳〵いでゝ、函館灣内いと靜かに錨を投じ候。こゝに來て見れど、さすがに對岸とはいへど、青森にとゞまれる人の氣の毒にもなり、今霄まで空しく一晝夜をまたむことのいかにあだなりしかをればに候。

函館の盛なることは、打見わたすのみにても明らかに候、五時間の碇泊なれど、上陸せむかとも思ひたれど、そは歸さのことゝして、今はたゞよそに見て過さなむと、船にとゞまりをり候。九日朝、函館灣内敦賀丸にて。

養痾漫筆（二）

親々書屋主人

病を北條の里に養ふこと、既に二ヶ月にわたり、朝たに海濱に遊ひ、仰いて富士の根を海原遠きかなたに眺め、俯しては岸うつ男波女波の清きに心を洗ひ某の中納言にはあらねども、貝ひろふ乙女、網引く海女に宿はと問へど、これに歌もて答ふる、村雨松風の如き、歌このめるやさしの女もなく、たゞ色黒くて髮は蓬の如く亂れ、素足にて網ひくさまこそ、怪しくもまたをかしけれ。

余は思のまに〳〵、名勝古跡に杖をひき、そゞろ遊ひをす。かつて諸孃に約せれど、今孝子義民の跡をたつね書きしるして、道しるべにせん。孝子義民の墳墓は、安房郡國分村にあり北條町を距ること二十町にして近し、余の遊びし日は、風暖かに、十月の

小春とて、所々に梅桃など返り咲して、農家のかどに笑ひ、いとうら〳〵かなる日和なりき。北條町の中程を南に折れて行く、道路は新たに修繕やしけん、いと平にして直く、四方は田畠遠く連りて、耕へす乙女らが歌ふ聲はるかにきこゆ。此の街道は、白濱根本など稱ふか漁村へ達する道にして、彼村にて捕り得たる魚は皆車にて北條にはこび、東京へおくるなりといふ。げに道すがら、十七八歳の女等が、さめまぐろ、さんま、など車にのせて運ぶもの幾何といふ數を知らず。途中風なまぐさし、路に一老婆の竹かごを負ひたるあり國分村へ行く道はと問へど、老婆わざ笑ひて、この里にて、分國を知らざる、人やはある。君は定めて遠き國の人ならん、彼に見ゆる村こそ、國分村なれと、笑ひて指さし示す。老婆を友として、ゆく〳〵雜話す。田舍人なれど正直にしてかざらざることぞいやしけれども、其の心の清けきはたふとし。老婆余がなりかたちの里ぶりならぬを見て、余が顏をうちながめて、故郷などたづぬるもをかし。

國分村は國利寺あるをもて村の名とせり。老婆に敎へられて、まづ國分寺に詣づ。石垣のあと四足門など、古莊嚴のありさま、其のあとかたをのこせり。寺内釋迦堂の前に、高さ七八尺ばかりなる石塔三つあり。これなん義民の墓なり。一を秋山角左衞門と云ひ、一を飯田長次郎と云ひ、一を根本五左衞門と云ふ。屋代家に仕へし庄屋なりしに、苛政に苦しみ、多くの百姓に代りて、一死をなげうち、強訴せしかど、終に罪にかゝりて萱野といふ原の露ときえうせたりとぞ。世に房州萬石騷動といふは、これを云ふなり

余れは、三義民の、義をれもんじ、一死を輕くせし

に感んじ苔をはらひ、水そゝぎ、しばし墓前にぬかづきぬ。

萱野といふは 國分寺をさることも、五六町ばかり東の方にあり。孝子伴家主の墓は、こゝにあるなり。ゆきゆきて小松原をすぎ、小高き芝生の上に高き碑あり。これ家主の墓にして、碑のおもてに、家主の像をきざみ、其の上に日本書紀にのせたる孝子旌表の文字をしるせり。嗚呼家主は、片田舍にすみしみなから、徳一郷を化し、千歳の下に、其の徳をしたひて、來り詣づる人たえず。孝行の徳げに諸人のかがみにこそ。余拜しをはりて、元來し松原を過ぎ、北條にかへり、日なほ高けれど、また思ひたちて、鹽見の龍伏の松を見んとていてたつ。館山町をうちすぎて、右に岸うつ海原をのぞみ、松林つゞきなる街道をゆく。一里はかりにして、柏崎といふ村にいたる。前に沖の島、鷹島を眼下に臨み、洲の崎の岬、大房岬、はるかに相たいして、景色ゑがけるににたり。柏崎に三階の旅亭二ッあり。海にのぞみて高くそびゆ、山海の景を一樓に占めたりと云ふべし。柏崎より半里ばかりにして、鹽見村なり道の右の側に、臥龍松の三字をぎざめる石碑あり。こゝより入れば、これ龍臥の松なり。大きさ大人三四人にて抱くべし。地上に蟠まること數間のあひだにして、枝幹ともに苔蒸して、さながら龍の鱗の如く、龜甲形をなせる綠葉風をうけて、龍吟を聞くに似たり。樹の下に立ちて望めば、海をへだてゝ雲井に富士の根を仰ぐべし。かたはらにやれたる寺あり。老僧これを守り、茶などくみて、來る客をもてなす。老僧に松の由來をたづねしに、古此の浦に、舟にのり來れる遊女ありて、病にかゝりて死しかば、村人あはれみて、この

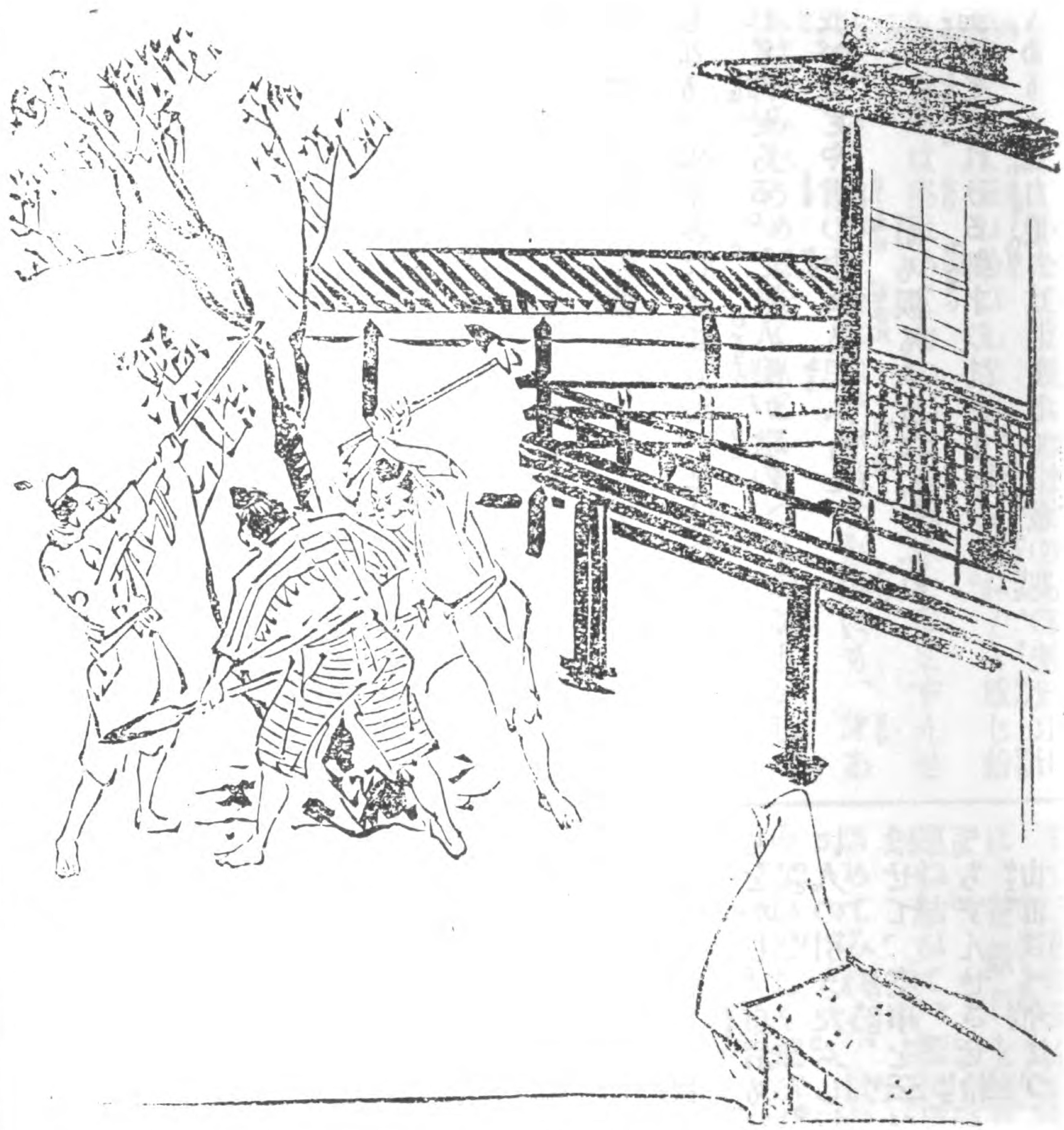
里に葬り、供養して、墓のしるしとて、この松を植ゑたり。ゆゑに昔は、遊女の松といひしを、後に白河樂翁公、この地に遊ばれしとき、名をたまひて、臥龍松とよべり。實に千三百年をへぬる古松なりとぞ余いまだ、唐崎の松はみざれども、松のふるくして形の妙なる、おそらくは、この松には及ばざるべし。まして其の幹のふとき、技の四方にのびたる、莊子が云へる、百牛を蔽へる木にもまさりつべし。たゞ天さかる鄙にしあれば、今まで、何人も問ふことなく、幾百年のあひだ、空しく雨に沐し風に吟じて、過ぎにしこそ、不幸なれ。しばし老僧とかたらひ、いとま告げて北條にかへれり。一日のあそび、病の身には、いとつかれをおぼえたり。夜にいりて燈火のもとに、養痾漫筆の二をかきつけつ。

才くらべ（十五）

蓬生屋女史

后の宮と清女

二月の十日ばかり、中關白道隆公、法興院の釋泉寺と云ふ御堂にて、一切經くやうせさせ給ふに、おはしまさんとて、かりにしつらはれたる二條の宮へ、朔日のほどよりわたらせ給へば、清少納言も御供し奉りぬ。かりながら殿の御心を用ひ給ひて、宮のありさまもの〳〵しう、みすより初めて淸らにかけ亘し、獅子、こま犬までしつらはれたるをかしきに、御梯のもとに、櫻の一丈ばかりにていみじう咲きこぼれたり。梅こそ盛りなるべきに、いとかう咲きたるかなとおどろかれぬるは、作りし花なりけり。されど霞の下りたるさま、春風の香を咲きおくる、すべて咲きたるにおとらず、いとをかしう、みるほど



に、日を經るまゝ、色はまさらで、日などに、やけなどして詫しきに一夜雨さへふり出でたり。すはこそ口惜し、櫻は如何にしをるらんと清女いとゞ起きて、泣きて別れしかほに、心れとりこそすれなどつぶやきぬるほどに、殿の御方にも、其しほれたるむとくのさま、人に見せじとて、はやく下すどもに云ひつけて、夜のあけぬほどに引きたふし、たゞとらせけるに、清少、心にをかしう、花ぬすむものは誰ぞとがむれど、げすども笑ひて逃げんぞかりに、ひ

き拔き行くに、兼澄ならむ、答へもせんと、清女はひとりをかしう「山守は云はゞ云はなん」の歌を心にうちずしたり」。さて夜もあけ、かもんづかさ參りてみかうし參りなどするに、宮もおきさせ給ひて、花なきにおどろき給ひ、如何しつる。よべ花ぬす人のありとは知りたれど、枝などすこし折るにやと思ひしに、根こじに去りしは、殿のかくさせ給へるならむとて笑はせ給へど、いでよも侍らじ、春風のして侍りなんと清女の啓するを、さ云はんとて、かくせしなり。ぬすみにはあらで、ふりにこそふるなりつれと仰せらる。之れ人麿が歌の

我がごとや雲の中にも思ふらん
　雨も涙もふりにこそふれ

の詞をとられける御才のほどもいみじ。やゝありて關白殿おはしまして、彼の花の失せにけるは如何にぬすまれけるぞ、いぎたなき女房かななどの給ふに、されど、我より先きにとこそ思ひて侍るめりと忍びやかに清女の云ひたりし重ね〴〵の才のいみじさ、之は、壬生忠見が

鶯のなく音を聞けむ山深み
　我より先に春は知りけり

の詞をとりて、君がかくし給ひしなれど、我よりも先に知ろしめさんものをと、あからさまに云はで、歌もて、あらはせしに、げに先きに見つけしは、必ずそこと宰相との程ならんと、我しらず、ほざし給ふもをかし。皇后もおくれず、そは知り給へ、さやうに人の引きたふし行きしものを、少納言は春風におほせて、空事を云ひ侍る。今は山田もつくるらんとうちずんせさせ給ふもまためでたし。こは貫之集に

山田さへ今はつくるをちる花の

かごとは風におはせざらなんの歌をとりて云ひ給ひしなり。殿も重ね〲感じ給ひて、春風は空にいとをかしうも云ふかなとずんせられて、いと興がり給ひぬ。早敢なき事にも、才ある人はいみじうめでたくもとりもつものなりかし。

笑話 （奇談一笑）

かゝみ

東寺の四塚

今は昔、雀の多く聚る處に、柿の葉、數百をまき散らし、その葉毎に、酒をそゝきかけて、石をもて、之を鎮めおきつ。こゝに雀ども、之を飲みしかは、みな酔ひて、この石を枕して、悉くうち臥せり。さて之を捕ふること拾ふか如し。といふを、京師西郊の人、これを聞きて、うれしき事におもひ、試みはやとて、その云ふか如くにしつれど、まことに時の間に、雀數百を獲たり。さてこの雀を縄もて、悉く連ね結ひて、腰に帶ひて歸る。途にして、雀とも酔さめてみれど、はやくみなつなかれたるに、驚きて、みなひとしく飛びたちしかど、其の人縄なからもたげられて、東寺の浮屠の上にもてゆかれたり。おどろきあわてふためきて、腰につけたる縄を解きて、雀を放ちやりて、且たすけてよとて大聲によひしかは、人々聞きつけて、その浮屠の下に聚れども、之を救はんに計なし。その中の一人がいはく、かの屋根の上なる人に、浮屠の上より飛ひ下らしめ、下にては、蚊帳を張りて、之を承けなど、事もなくて、やすからんといふに、人々實にもと思ひ宜なひて、四人の人をして、各蚊帳の一隅をたもたしめて、屋根の上なる人、この上に飛ひ下りし時に、その飛ひ下れる

勢に打勝へずして、四人諸共にうつ伏しに、頭を地にうちつけて、死にき。やがて之を一の塚にをさめて東寺の西南の地に葬れり。之を名づけて、四塚といふ。この塚今もあり。（といへども、まこと僞りは、如何あらん。）

まつの庵（二）

白魚女史

平治、と小ものを召すとたん、眼を射んばかりの電光と共に、家をもくづさんずるいかづちのとゞろき、あなや、うしろの銀杏に落ちたらんすさまじとばかり、松虫との音も出でず、母が膝にすがり伏す姫、門にもれそれてや、一聲高く馬さへいなゝくに、之も雷電のとゞろきかと、姫はいよ／＼耳ふたぎて、まろびふすに、流石母なる人はさばかりもさわがず、何やらいぶかしげに考ふる折りしも、奥の方に、歌の卷手にしつゝ、枕高うやすらひたりし主人、はて、只今の馬のいなゝき、我が飼ひならしの駑馬とは覺えずとて少しく首を上ぐれば、我夫もさはおぼしめされてか、妾もいぶかしう思ひ侍る所、やよ、誰か居らずや、門に若しや雨にぬるゝ人のあるにはあらずや、平治、／＼、やよ誰れにても、聞えずや平治と次の間の方ふりむく眼に、またさす電光、思はず身もわなゝく折りから、申上ぐる事侍りとふすまごしに手をつくは、靑にびの狩衣、袴きたる四十路あまりばかりなる、質朴げなる下男なり。れし平治、いたう呼ばせし事よ、門に誰れかぬるゝ人はあらずや、とく見て來よとの仰せに、平治平伏して、申上げんは其事、都の御方の雨にぬれ給ひて廊によらせ給ひぬ。閑院殿の郷子とかや承り奉るとかしこみ申す

言葉にも禮ありて、此處らにはめづらしきばかりなり。

かくと聞くより主人はいたくおどろき、かつばとはねおきて、あなかしこ、とう此方へ御案内申せ、さばかりはぬれ給ひけんと、にはかにあたりとりつくろひ、火ともしなどし、いで〳〵あやしの宿ふみ奉らんすきもなう思召れんが、木の下にはなほ增り侍らん。とく〳〵などまめやかに自ら迎へ出でゝ上座に請ずるあり樣、とく道あり。御子はやみ路に仙洞のありし心地、うれしう、したゝる御衣をしぼり、しぼり、重武もろとも內へ通り給ふ姿を見るより、さてはいみじうも雨にうたせ奉りしかな、今少しとく心付くべかりしものを、あまりにもぬらし參らしたり。御衣ぬがせ給へ、乾し參らさん、誰れにても新らしき直衣をと云ふ聲の下に、早く用意やしたりけん、衣一重、新らしきを撰りて持ち出で、あらたへには侍れど、ぬれしにはまさり候はん。しばしの間をかへさせ給へなどとて、すべり出でたる妻女、年三十路ばかりなるが、練色の衣のこはらなるをつけれど、物ごしいと靜かに、姿も形も何となうみやびて、床しう見ゆるに、平治よ、御馬をうしろに引き入れて、草かはせよと、外の事にまで心くばる主人の言葉つたへんとて、またいざり出でたるありさまいかにもかはらかに、めでたげなり。御子は、主人が厚き情のつゆに、またぬれつゝ、つく〴〵とおぼしめぐらせば、下衆の家ながらゆゑ〴〵しく、をかしくして、ひあじろをもて天井にし、めぐりにあじろ屏風立て、清げなる高麗べりの疊三四帖ひきたり。御衣やほし參らさん、ぬがせ給へと主人のなほすゝむるまゝ、裝束とき、流石につかれ給ひけん、そ



のまゝうち臥し給ふに、さらむ乾かし奉らんとて、御狩衣指貫もちて、主人の立ち去るに、重武は流石、共にまろびれもせず、苦しさにつゞき立ちて、いろりのある所へいたりて、我が衣は自らあぶらんなど云ひつゝ、此方にくつろぎぬ。

さる程に、雨も小さめになり、なる神の音も遠くなり行きしに、松虫は如何にかしつる、早やふり出る頃なるに、なかぬは、死にやしつる。あはれの事しけるよと例の少女の已れより泣くねするに、何をさやつしき事又云ひをる。れろかな、幾つぞ、七つ八つの子にもあらぬに、その高つき、奥の御方へ持ち行きねと叱るも忍びね、少女は何やらんれづ〳〵して、容易くはこび出でんともせざるに、何をたゆたひ居る。下乗ながら、弓矢たざさむもの、女、人にれくるゝ事やはあると叱られ、是非なく、片手に扇さしかざし、御膳を取り、ひさしの方のやり戸を、やをらあけて、御前遠くれきすゑたる いとはづかしげなり。



文林

梅　德大寺實則

香をしめて歸りしひとに志られけり
すき田のうめは今さかりそと

早春雪　鍋島直大

かきくらし雪はふれとも積らぬは
春になりたる志るしなるらん

雨後鶯　高崎正風

はるさめのなごりの露に濡なから

枝うつりしてうぐひすのなく

山家梅　前田利鬯

みやこ人とひはこねども梅のはな
開けはひらくにはのしをり戸

雪中鶯聲　長谷信成

鶯はひとくとなけとやまかけの
にはのしら雪あとなかりけり

園梅　西三條實義

昨日までとふ人もなきわかそのゝ
うめ咲しよりにきはひにけり

新年雪　宮地巌夫

ほの〳〵と富士の高根の雪よりそ
夜はわけそめて年たちにけり

折梅花　植松有經

梅のはなをりて小瓶にさしたれは
また一しほのにほひそへけり

翠松　大口鯛二

春ことに一しほいろのそひそひて
ふかみとりにもなれる松かな

朝鶯　岩崎勝從

心ちよくれはゆる物はのとかなる
はるのあしたのうくひすの聲

山家迎年　三浦千春

ことさらに立たるならぬ御山への
門のまつにもとしたちにけり

海邊鶴　仝

青うな原みゆるかきりは島もなし
いつこをさして鶴のとふらむ

富士艦を見て　三輪義方

うこきなき富士のたかねを大海に

浮へたりとも見ゆるふねかな

新年雪　仝

しつかなる千代田の雪の朝ほらけ
民さむからぬとしや立つらん

藤原藤房卿　足立正枝

いさめつる千里の駒のそれならて
ゆくへもしらすなれる君かな

曾我兄弟　菊地眞澄

しゝならぬ仇はかり場に打得ても
あはれ裾野のつゆと消えけん

新年雪　西内成卿

ゆたかなるとしの始のよろこひの
屋毎につもる今朝のゆきかな

小夜女、菊女　佐々豐水

柞葉のかけたちならし織るはたの
音たかき名をあふかれにける

松上雪　横山碩次郎

雪降れはみとりの松もいろかへて
すかたのみこそ常盤なりけれ

窓前梅　近衞貞子

うつりこん鶯もかなまとの外の
梅はれはかたさかりなりけり

風前梅　鍋島榮子

ふかすともにほひ餘れる梅か枝に
絶えすもかよふのきのはる風

春鶯呼客　柳原愛子

わか庵はめつらしからぬ鶯の
聲とめてくるひとそたえせぬ

海邊霞　小池道子

白波はかすみのそとにたつまりて

れきに見えゆくいさり火の影

水郷霞　　松平健子

またさかぬさくらか枝も春めきて
面かけかすむうしじまのさ

森鶯　　北島[illegible]登子

うくひすもなく聲たえす聞ゆなり
野なかのもりのかすみ隱れに

早春柳　　岩崎寧子

はる淺みあをみそめてもわか庭の
柳のつゆはなほこほりつゝ

梅始開　　大谷章子

はるされは雪また消ぬきのふけふ
早さきいてつのきのうめか枝

霞添山色　　高崎竹子

畫たくみも筆すてつへくみゆる哉

かすみそめたるはるの遠やま

若木梅　　鶴久子

此さとにわりともしらぬ梅はやし
わか木のみこそ多く見えけれ

新年雪　　藤原房子

豊なるしるしも見えてわたらしき
年のはしめにつもるゆきかな

元日試筆　　安東菊子

初日影あきらけき世をことをきて
まつ書きそめつやまと言の葉

新年松

立かへる年もまとはしいへ/\の
門にかさりしまつをしるべに

かたゐの雨にたてる

伊勢　露月

蓬髮垢面、乞丐の、
　目もしひ、鼻もかけ穿けて、
　纏ふ襤褸は、海布の如し。
煙雨濛々、大道の、
　右に左に、もの乞へど、
　叱る市人は、鬼か蛇か。
　かうべを垂れて、しを〳〵と、
杖にすがりて、よろめけど、
犬こそほゆれ、二ッ三ッ。
朔風凜々、身戰々。
腹は空しく、足は難む。
しめり勝なる、やれごろも
雨となみだに、ぬれまさる。
いづれの軒に、宿かりて、
寒き夢路を、たどるべき。

物こへをふりはらはれてそで乞の
　咽ぶれは路に雨もふりきぬ
ふる雨にたつはかたゐか瘋のごと
　みだれし髪に露むすぶなり

犬

紫光

月もなき冬の夜、いよ〳〵更けて、空には、星の光のみさむげにきらめく。行く人の影たえて、ちまたには、霜も、いたくおくなるべし。をりから、寂寞をやぶりて、犬の遠吠の聲のみぞ、いとゞ物すごさをそふる。西の方におこりし聲、やがて、南にうつり、南より東に、東より北に、こゝにおよび、かしこに應へ、夜風にさそはれたる聲音いはむ方なし。

かくて、夜も二時にやなりなむとおもふ頃、とある家のほとりを、ゆきつもどりつうかゞふ曲者あり。かの、たちさはぐ白波のたぐひにやあらむ。塀をこすべきたづき求めむとやすらふ。をりしも、この家の門守る犬の、これを見いでゝ、聲たてゝ、けたゝましくなく。曲者は、かくてはたよりあし。仕損じたりとやおもひけむ。つとたちよりて、袂より竹の皮につゝめるものとりいでて、犬にあたふ。犬はよろこびてうち食ふけはひなり。おのが主の爲をもわすれ、おのが、門守る務をもよそにして、ひたすら、曲者に媚びて、尾をうちふりなどす。曲者は、かゝるひまに、やすくとしのび入りて、あとには、見越の松の枝のゆらめきのみ殘れり。家の内の人々は、皆うまゐやしたらむかし。夜くらくして、その後のことを知らず。

あはれ、桀狗の堯を吠ゆといひけむも、猶、その主の爲にせるなり。さるを、主の爲に養はれ、主の家を守るべき務を、身におひながら、好餌にひかれて、主にそむき、務をわするゝ犬あるこそ心得ね。徒に、遠吠をのみよびかはしつゝ、夜のものさびしさをそふるとも、何のかひかあらむ。されど、世には、かゝるたぐひ多かり。たゞに、犬をのみ咎むべきにあらず。表に、愛國を飾り、口に、道義を論じつゝ、暗夜、私を計り、好餌の爲に、國家を賣り、友をそこなふものも、世には少からざるぞ。

露西亞にゆく人をおくる

青苔

わが友某、こたび露西亞にものせむとす。こゝに馬のはなむけせむとて、親しき限打つどひぬ。花の朝

月の夕べこの年頃共に〳〵思ふこと打ちかたらひて、たのしび遊びつれど、おのづから其會とは異なれり。いかで思ふことながらましやは。いふことなからましやは。

世界は廣し、萬國はおほし。されどかの露國ばかり、われに親しきはあらじ。わが國人たらむものは、いかで忘れてやあるべき。

わが國と清の國と、戰鬪の和議成り、我邦人のそゝぎし血しほと、費ひし財寶とに報いて、われに致すべき地の内に、遼東半島もこそありたりしを、かくてはかの國の怨をかひて、末終にわが爲めによからじとて、そを還し與へよと、わが國の末の末のことまで心を用ゐて、まめやかに敎へくれしは、かの國ならずや。

國貧しく人よからぬ朝鮮の國は、いつまでもわがの恩惠によりて立ちぬべきものと、かれも思ひ、われも志かれきてゝ、金子を與へ人をやり、何くれと助くるに、むつかしく、わづらはしく、殆堪へざらむとするを見て、かくてはいかに隣國のよしみあればとて、いつまでつゞくべきにあらず。いでや其責にあづからむと、自ら金子をいだし、わが人をかへして、その人を入れ、わが苦を救ひしも、またかの國ならずや。

わが國内の、ある山ある海に、さるべき人たくりて、高さ低さをはからしめ、深さ淺さをさぐらしむ。これぞまことにわが費を用ゐずして、わが人を勞せずして、普くかの國に、わが地圖を見ることを得せしむ。この功をなせるはたゞ露國ならずや。

古くは、あしき樺太にかへて、よき千島をわれにとらせたる其あつき心より、近くは、西北利亞鐵道を、

遠長きあら山廣野に志きわたして、われらが大陸に出づる便を與へむとす。すべて成らむ日には其親しき心をます〳〵志き及ぼして、わが邦にそゝぎ入れざる方もあらじ。

を指折りかぞふれど、十二十と數も限もなき、かの國の志たしき心ざしには、いかにしても報いずてはあるべからず。さらずは、わが國民は、義もなく耻をもしらずと、心ひそかに笑はるべけれどなり。今君は、この心あつき國にものして、その山川のけしきを見、その風俗習慣を見むは、いかばかり君のためにおもろしく、はた益あるわざなるべき。君のおもしろく益あることは、やがて國のためにもおもしろく益ありて、かの國に報ゆるもとゐともなることなれど、われ等は、とくその家づとさはにもたらしたまはむことをのぞむ。

さるにても、さばかり親しき國柄なれど、又いかに心あつきもてなしあらむもはかりがたし。霞たなびく春の日の花蔭にくらすおもしろさ、はた澄わたる秋の夕の月影にあかすたのしさに、かの山川に親しくのみなりて、忍が岡の上に、墨田川の流に、われ等と共に〳〵遊びしことをも忘れ、うとくのみなりゆかむことをおそる。さても、今さることいふべき中らひかはと怒り給はむは、中々にわが望む處なり。ゆけ〳〵、この望ある門出を祝はむ。海又海、山又山、風さむく雪ふかゝらむ。われはたゞ君の身の平らかならむことを望む。そはわが爲めのみならず、君の父母の君のために、あらず、わが邦のために。



雜報

●英照皇太后尊　崩りましてより、上は、至尊をはじめ奉り、下は億兆の臣民、薪樵る山賤より、藻刈る海人に至るまでに、藤衣乾くひまもなくて、きのふ今日と、暮るゝともなく暮れゆきて、はやくも一年の御祭の日となりにたれど、去し十一日、青山のかり宮に御祭せさせ給へり。午前九時といふに、まづ嵯峨祭主をはじめて、甘露寺伯爵、錦織子爵、高松子爵、野宮等の祭官、祭服束帯して、御靈殿、御祭塲に侍ひ、笛つゝみを奏で、御酒、御饌を奉る。こゝに午前十時、天皇陛下御代拜として、侯爵鍋島直大、參りて、御玉串を奉り、次に、皇后陛下御代拜としては、典侍高倉壽子、御玉串を奉り、皇太子殿下御代拜としては、東宮侍從武官大迫貞武、御玉串を奉り、又、内親王殿下御代拜には、小池道子、御玉串を奉る。さて又小松、伏見、閑院の宮殿下、同各宮妃殿下、華頂宮殿下、同故博經王妃殿下、同妃殿下、各御玉串を奉り、次ぎては、元大喪使、次官以下、事務官、元皇太后宮亮等同じく御玉串を奉る。これより、大勳位、親任官、從一位、勳一等、勅任官以上のもの參拜せり。この重なる人々は、土方宮内大臣、德大寺内大臣、野村遞信大臣、濱尾文部大臣及び大木、橋本、東久世、副島、勝、榎本等無慮二百餘名なりき。こゝに御前式終り、午後一時より三時までの間更に各廳奏任官、有位、有爵者、從六位以上、勳六等以上の輩、並に神佛、各宗管長、門跡住職以上の輩等、一千百餘名參拜せ

り。さて全く式を終れり。この日、京都なる泉山御陵にても、御祭せさせ給へり。午前九時四十分、兩陛下御代拜、有栖川威仁親王殿下、同宮妃殿下、泉山に着せられ、しはし憩はせ給ひ、さて木戶、伊藤兩式部官の御先導にて、御陵前にすゝみ給ひ、なほ小松宮、山階宮、久邇宮各殿下以下、大喪事務官等侍べり。さて御祭のことおわり。十時三十分、兩御代拜の宮殿下は御下山せさせ給ひ、次ぎて、宮內官吏各女官 各宗管長 有位有爵 者等の參拜あり。かくて全く御祭終れり。京都市にては、官衙、學校、會社、銀行等皆業を休み、謹愼して敬意を表せり。

●御祭具　このたびの御祭に用ゐさせ給へる御祭具は、高田茂といふ人、命をうけて奉れり。青山、泉山、何れもすへて、百日祭にかはらせ給はすとなり。

●御靈殿　青山御所なる御靈殿は、やがて宮中賢所の皇靈殿に御遷靈あらせらるへきを、古來御景服は十三ヶ月なれど、天皇陛下には、古式に遵はせ給ひて、卽二月下旬に、御遷坐せさせ給ふべしとなり。

●大祓　かくて去し十一日にて、御喪期はてさせ給ひしかど、十二日正午、鳳凰の間の御殿をしつらひて、午后一時宮內大臣以下、參候し、九條掌典長の奏請にて、天皇陛下出御ましく、侍從、御服、御麻を奉る。陛下は御手づから侍從掌典長にかへし傳へさせ給ひ終りて、入御あらせらる。こゝに御祓の式は終り、つゞきて午后二時宮城正門內の幄舍に掌典長以下、各省勅奏判任總代各一人つゝうち集ひて、大祓の式を行へり。

●彰善會　とて　天皇陛下の大御言の旨を奉体

し、世にかくれたる善行のものを彰すを旨とすといふ。さて會長には、高崎正風男を推し、公爵二條基弘、公爵近衞篤麿、侯爵黑田長成、伯爵土方久元、伯爵勝安芳、子爵品川彌二郎、子爵福羽美靜、男爵揖取素彦、細川潤二郎、谷鐵臣、島田重禮、南摩綱紀諸氏の搢紳碩德、評議員となり、朝野名士の贊成頗る多く、事務所は、小石川區茗ケ谷町にあり。最美譽なり。明けき御代ながら、これよりはなほいよ〳〵善行のもの、埋木の人しれずくちなんうらみもなるべし。

●東京女子職業學校の生徒へ、宮内省より、御用品として、圖畫、編物、刺繡、造花等の調製を命せられしかを、生徒等一きは心をこめて、製りあげたる總數九十餘點にして、代金としては金二百四十餘圓に及べるといふ。名譽のことゝいふべし。さて其の重なるものは、

圖畫大額面	式部圖	金十圓
編物		金二十圓
刺繡	帛紗 鷄の圖	金二十圓
同	額面 孔雀圖	金二十圓
造花	松竹梅大鉢植高五尺餘	金三十圓

●繼母の鑑　繼母といへど、まゝしきものとおもふめるもうべなり。世にさるものゝ多かるめれどなり。こゝに岩田初吉の後妻たていといへるは、土佐の國、香美郡、美良布村の人なり。常によく、先妻の子を愛し、貧しき身ながら、よく教育するのみならず。をり〳〵離縁せし先妻に、親子對面せしむるなど、感ずべきこと多しとて、見きくもの賞せざるはなしといふ。繼子とても、わがたのめる夫の子なるを。わが生まずとて、苛酷にあつかふは、物しらずにて、數には入らぬなり。

●夫婦の孝行　これも感ずべし。山形縣米澤市、越

後番匠町、櫻井米三郎といへるは、はやくより教員となりしが、明治十年、繼母病にかゝりしかど、直に職を辭して、夫妻ともに看護怠りなく、一日の如くにおくりしを、明治十九年父またはげしき病にかゝれるに夫婦の驚き大方ならず。寢食をも忘るゝばかりにて、看護おろそかならず。瘠せつかれて、病者と見ゆるばかりなるに、なほいさゝかも孝心たゆむことなかりしかば、聞くもの皆、篤行に感じて、このほど知事に上申せしに、去月二十日、あつく賞與せられたりといふ。教育者として、はた子たる身として、世のかゞみとすべし。

●孝貞　渡邉かねよといへるは、羽後の國由利郡、東瀧澤村、渡邊七造が妻なり。孝貞の行あつかりしを以て、賞せられて木杯を賜れり。

●これも亦　孝貞のきこえたかし。津川ゆきといへるは、讃岐の高松市の人なり。夫身うせてより、世のすぎはひに便を失ひ、いたくおちぶれて、今日を過すに窮すれども、志操いよいよ堅固にして、姑に事ふること、生母に事ふるが如し。されば事知事にきこえて、金五圓を賜りて、賞せらる。

●孝子　岡山縣、久米北條郡、大倭村、大字神代に住める岡本七郎といへるは、住む所の名にはぢず、孝心至りて深く、老母病にかゝりて、半身不隨となれるに、側に侍して、奉養おつるくまもなきに、一郷ほめたゝへざるはなしといふ。縣知事、金五圓を賜ひて、その孝德を賞せり。

●これも　いと可憐なり。仙臺の伊藤儀助といへるは、今年十三歳になれるが、家貧しけれど、毎日に新聞の配達をして、纔に學資を得、九歳になれる弟をはげまして、共に學校に通學し、かくても亦、

夜は目しひたる病夫を看護すとは、聞くたに、涙くまるゝよ。

●幼童ながらも奇特の心がけあり。未たのむしき少年よな。北海道、石狩の國、厚田、望來小學校の一年生、市橋市治といへるは、このほど、佐渡にて、大水のために、學校生徒の困難すときゝて、みづから日々の小使錢をつかひさして、寄贈せりといふ。北のはてに生れたれど、心がけは大やまとの國にみてりといふべし。

●不孝不貞　のもの顔色なかるべし。一時も疾く心を入れかへて、まことに日本に生れてはつかしからぬ、いさぎよき人となれ、むかしより、臣民をば、大君の大御寶ともいふぞ。一人として、この國に生れたらんものは、これにはもれざるべし。深く心をれちつけて、君の御惠の廣く厚きを思へ。

●と書き　をへんとするに、女生徒、退校せしめられつといふ。耳たはひて聞くまじとおもへど、さてあるべくもあらねだ、きくに、廣島縣、三上郡、庄原高等小學校の女生徒なにがし、下宿屋にありて、私事をほしきまゝせれだなりといふ。嗚呼のわざかな。この女とく心を改めよ。かくれたるよりあらはるゝはなしとしらずや。

●臥龍松　といふ題にて、ひろく和歌を募るといふ。このぬし備前の國、和氣郡、大内の里なる臥龍松園主。この松、東西四十二間、南北三十間、高さは三間にて、この名は、備前藩侯の撰せるなりといふ。

●老媼齢百一歳　にまで高くなれるは、めでたし。七十は古來稀なりといふをや。今京都市、上京區、二條通寺町、東へ入る榎木町五番戸に住める、森川と

みといへるは、寛政十年（第百十九代　光格天皇の御代）三月五日、といふに、京都西陣に生る。二十歳の頃、同じ聖天町なる平野屋總平に嫁ぎて、三男一女を生めり。はやく夫總平に別れたるに、ほどなく長男次男も身うせければ、身を寄せんに所もなくて、三男なる千葉諦巖といへるが、丹波の國福知山に、淨土宗方廣寺の住職たるを、賴みて、日を送りけるが、二十年ばかり以前にこの諦巖も病にかゝり、生くべからぬをさとりて、弟子岩井智海に、老母の奉養を托して、うせにき。智海先師の遺言を守りて、厚くもてあつかひしを、去年の秋、福知山に洪水みなぎりて、方廣寺もこの災にかゝれり。末女のよしといへるは、七十二歳なるが、京都市、上京區、二條通寺町、東へ入る榎町に、實子德兵衛といへると共に、不足なく暮せり。老母の事を傳へきゝて、德兵衛と共に、福知山に到り、智海に請ひて、去年二月十七日といふに母を連れかへり。これより老媼は憂きことも知らで、けふを過くせり。幼き時より、重病を煩ひしことなく、體は痩せたる質にて、歯は五十歳の頃、みなぬけ落ちたり。視力は九十歳のころまで衰へず。眼鏡を用ゐずして、新聞紙を讀めり、されど十年このかたは漸く鏡を用ゐるに至れり。耳は去年よりうとくなり、精神も、去年洪水のころより、稍衰へたりといへども、なほ一日に米三合を食し、魚肉は性来の好物にて、酒はすこしも飲まずといへり。百一歳とは世に稀れなる高齢者なり。この後なほ八千代までもいきながらへて、君が代の萬代にもあひねかし。

●一家に夫婦四つ　ありといふは、いとめでたし。東京府下、荏原郡、馬込村に住める岸田鐵五郎とい

へるは、今年九十五歳の齢をかさね、妻のなかといへるは、九十歳なり。身すこやかにて、壯者も及はぬばかりにて、二人の間に三男四女あり。長男を萬五郎といひて、六十七歳。妻らめは六十一歳なり。次男を與吉といひて、六十三歳。妻すゞは五十歳。三男は新次郎とて、五十七歳。妻つやは四十九歳なり。さて各七八つゝの子をそだてり。この鐵五郎といへる父は八十餘歳までながらへき。鐵五郎をさなき折は、身よわりて、成長もおぼつかなき樣なりしか、七八歳のころより、壯健になり、これよりは服藥せしことなしといふ。妻のなかは、芝西の久保の生れにて、十四歳の時、こゝに嫁けり。持病の癪のをりをりおこることあれど、外には病氣なく、夫婦ともに、立ちはたらく癖ありて、しばしも怠ることなかりけれど、里の人々も、長命ならざるべしといひあへりしが、かへりて今の高齢に至れり。今なほ、川わたりよき所に、端居して、衣物のときものなど、さまざまのことをなして、少しも老いぼうけず、人みな羨まぬはなしといふ。この夫婦つねに間食をせず。酒は好まずして、今は小き椀にて、粥二三杯を常食とすといふ。一家に四夫婦すみて、家も富み、仲らひも睦しくてありといふ。めでたきことにこそ。

●かゝるも稀なり　中尾淺右衛門といへるは、河内の國、河内郡、大和田村、大字打越といふところの人にて、農業をなりはひとせり。今年七十六歳なるか、妻の竹といへるもおなじ村の生にて同じく七十六歳なり。夫婦となりてより、今になるまで、六十一年か間、一度たもいさかひせしことなく、ともに躬も壯健にて、醫藥を服せしことなしといひ。二人の間に男女あはせて、八人の子をもてるか、いつ

れも壯健なりといふ。淺右衛門、男盛のころは、酒三升を飲み、五勺どりの餅五十個を食ひつくし、一石二斗ばかりの物は、苦もなくおしあげ三十貫目ほどの荷を負ひて終日旅すれども、さむかりつかれもせず。今老年になりても、酒一升、餅二十個、荷も二十貫ほどのものは荷ふべしといふ。は世に稀なるべし。

●一郷長壽多し　とは産土がらか。茨城縣、那珂郡、中野村、大字柳澤の下區といふ所には、一郷戸數あはせて十六七ばかり、人數七十餘人なるが、この中、長壽のもの多く、まづ九十四歲の女一人、九十歲の女一人、八十七歲の男、八十六歲の男女あはせて四人。すへて七人なり。何れも身すこやかにして、子孫らとともに、農業などすといふ。羨まし。

●陸軍藥劑監石塚左玄氏の演說　舊臘、九州地方巡遊中なりし石塚氏は、大日本私立衛生會熊本支會の懇請に依りて、十二月十日熊本縣會議事堂にて、食養長壽論の演說をせしといふ。さて、その論の大要は、

人は食物の種類を　自由自在にし食物は又人の身體を自由自在にするものにて則ち人は食物故に如何様ともなるものなれは大に之が選擇を勉めさる可らす是を選擇するに何を以て標準となさんか即ち齒の形狀に由りて見る時は人間の齒は臼狀にして他の肉食動物の如く鋸狀にもあらず草食動物の如く平盤なる齒形にもあらず自ら穀物を食するに適する樣になりて居るものなれは食物とすべし而して今古東西を問はず何の國に於ても其己に適したるものを食し自然に從ふ時は無病なるものにして己に適せす自然に反せは從つて病起るものにして人は萬物の長となり食物上に付ても色々の工夫を加へて此を食するもの故今日何の國如何なる人と雖ども殆んど病なき人はあらざるに至れり穀物其の他地上に生する植物は凡べて「加里鹽」にして鳥獸魚介其の他肉類は凡べて「那篤倫鹽」にして「加里鹽」は水を吸ひ「那篤倫鹽」は水を出すの作用あり故に兩者は相俟つて其作用を中和ならしめ「那篤倫鹽」の食物も「加里鹽」の食物に遇へは消化する如く即ち肉食をなす時に野菜を添食すれは消化を助けるが如きものにして現今「加里鹽」は物を破壞する性質を有し即ち能く物を消化せしむるものにして此をのみ食する時は病氣なく肉食をのみなす時は病あり種痘も肉食時代より初まり風邪も肉食の人は平癒に難く加之肉食の人は身體强壯頑丈なる樣に見ゆれども體內「那篤倫鹽」を以て充たされたるを以て內部頑硬脆弱にして忽ち死する事あり故に人幼時にありては殊に肉食を禁するを以て良とす即ち「加里鹽」を以つて食物とするを良とす而し

て「加里鹽」とは植物の異名と心得「那篤倫鹽」とは鹽及肉類と心得置かば大差なかるべし」云ふ

何食物の變遷及び、之に伴ふべき發病の狀況等を説き、終りに、其食物に因る心理的作用を詳述し、山には那篤倫鹽、海には加里鹽多きが故、山邊の人は長生し、海邊の人は短命なりと結論せりといふ。

●救急食糧　といふもの種々あり。昔人の物がたりにて、きくこともあるなり。今、早川良藏といへるは、今年四十七歲にて、新潟縣、西蒲原郡、地藏堂町に住めり。もと能登の國のうまれにて、家貧しかりしかど、十五歲の折、家を出でゝ、下野の國にいきて勞役して日を送りしが、その十七歲になるまで、三ヶ年のほどは、不作うちつゞきて、そこの農民どもみな、困究して、野山にわけ入りて、草根木皮を採りて、種々に製造して、食糧とせしに、良藏こゝにて、其の製法をならひおぼえたり。さて後明治二年、大河津分水工事はじまりて、工夫となりて、越後に赴きて、後こゝに居を定めたり。さるところに、昨年來その地方、洪水騷擾等にあひて、ものみのらざりしに、農民ども、大に究して、何くれと食糧の製法に心を煩せしが、この良藏その製法にくはしときゝて、去し十二月中には、西蒲原、三島兩郡の村々より、招がれて、その方法を傳授すといふ。なほ良藏みつからつくれる食糧を、地藏堂警察分署、同町役塲等にさし出せしを、人々試食せしに、細民のみならず、中等社會の補食ともなるべしとて、なほその製造を奬勵せりといふ。

製　法

△藁餠　藁をよく選りて水にて洗ひ、微塵に切りたるもの二升と、白大麥粉三升とを混交せしめ、熱湯にて揉み、湯氣にて蒸し、臼に入れて搗く時亦

た湯熱を加へ、頻りに手返すれば、追々粘りを生じ餅と爲る。之に食鹽を以て味を付けて食ふ。

△松の皮餅　松の樹の生皮を去りて、青色の所より肉付までの皮を採りて細末に碎きしもの三百目に、白大麥粉三升を混交したるものを熱湯にて揉み、以下藁餅と同様に製す。

△スマ餅　小麥のスマ（挽粉の滓）二升に、大麥粉一升を混交したるものを熱湯にて、以下前同斷。

△豆腐滓餅　豆腐滓二升に、大麥粉一升を混交したるものを熱湯にて以下同斷。

右の餅類は煮ても煎りても熔解することなく、且つ孰れも甘味を含みたれば中人も喰ふべし。

△大麥の粥　一日白米三升を要すべき家にて此の粥を用ふれば、白大麥一升五合にて足るなり。其の製方は白大麥を精ぎ、直ちに釜に入れ、徐々火を焚き、水の減るに隨ひ少しづゝ數十度に水を加へ、蓋をせずして二時間餘煮るなり。此の粥米三升に代る。

△樺太雜炊　三升鍋に味噌と水を入れ、次に大根なり、干菜なりを入れ、下等の大麥粉（三番以下の粗品）三合を加へ、頻に掻廻して煮る、此れ通常人二人の一日食料となすべし。

△一夜造の味噌　上州芋なり、甘藷なり、一貫目を湯氣にて蒸し、食鹽四合を入れて、臼にて搗き味噌とす、中人に用ふべく、二十日間は腐敗の恐れなし。

△上等の粥　大麥一升に、支那米五合を混交して粥に煮る時は、上等社會にも用ふべし。

●有住禮節教場にては、此度生徒を募集すといふ。即その規定なりといふは、

第一條　教授主眼
故實（伊勢、小笠原、普通）男女禮節を教授す
第二條　教場
東京市麻布區永坂町壹番地有住教場
第三條　授業課目
前期一ヶ年
起居進退　物品取扱　花結、折形、
後期一ヶ年
配膳　配酌　諸祝儀式　水引結形
○但し定期の授業を受けかたき場合に於ては臨時特別授業をもなすべし
第四條　授業時日
毎日曜日　午前八時より午後五時まで
第五條　出張教授
日曜日の外受教者の乞に應す
第六條　授業料
前期一ヶ月　金五拾錢
後期一ヶ月　金壹圓
束修　金五拾錢

右之規則により契約の上入場を許す

明治三十一年一月　麻布永坂町一番地
有住教場

●八支紀行　といふは一小冊子なり。日本赤十字社長伯爵佐野常民、同幹事子爵松平乘承、日本赤十字山口支部、及、九州の七支部を巡回せられし紀行文なり。佐野伯爵の詩賦、松平子爵の和歌、數多あり。全篇和文にして、松平子爵のものせしなり。（定價郵税共金八錢、發行所、東京京橋區築地二丁目廿一番地日本赤十字發行所）

●續日本歌學全書　第一篇は加茂眞淵翁全集の上卷なり。佐々木信綱の編纂に成れり。いとよき企なり。博文館の發行なれども。校正は佐々木氏みつからせしといへは、まづ誤もなかるべきか。和歌に志あるものゝ大にたすけを得べし。（定價金三十五錢）

●家庭文庫第一篇　女子普通禮式　下田歌子の著述にして、博文館の發行なり、まつ名の如くにして、普通一般の禮式を大畧かきつゝれるなり。（定價金三十五錢）

女鑑月並兼題

二月　五日　歌……池氷　文……希望
　　　廿日　歌……若草　文……盆梅
三月　五日　歌……雛祭　文……深山櫻
　　　廿日　歌……蛙　文……海人

原稿〆切は發行日十日以前の事



一月廿日兼題　春曙

天　肥後國菊池郡城北村　徳永萬壽子

横雲のなごりとみれはほのほのと
かすみにかはる春のあけほの

地　伊勢國松坂町大字日野町　堀　西愛子

ふく風はまたみにしめと春なれや
かすみはてたるしのゝめの空

人　東京市麹町區元園丁一丁目六番地名倉方　戸塚鐵子

むらからす森をはなれて明ほのゝ
かすめる空を鳴きわたるかな

秀逸　（十五首）

おほろ夜の月は殘りてにはとりの　吉川國子
こゑこゝちよき春のあけほの

ありあけの月はしらみてよこ雲も　神田春子
かすみになりぬ春のあけほの

ありあけの月はかすみに影きえて　永井さい子
櫻にしらむあけほののそら

おほろ夜のつきは霞にかけきえて　萩原喜久子
ほの〳〵匂ふはるのあけほの

咲きつゝく梅の花よりしらむなり　佳山幾子
杉田のさとのはるのあけほの

長閑さよかすみを洩てうくひすの　森永喜志子
はつねきこゆる春のあけほの

よしのやま花に遊ふとみしゆめの　白石梅子
さめてねならぬ春のあけほの

櫻さくかたねよりまつあけそめて　金原吉子
ほの〳〵しらむよこくもの空

山きはゝしらみゆけともたち渡る　岡田陽子
かすみにくらき明ほのゝそら

月影をかすみの袖につゝみきて　外川益子
ほの〳〵にほふ春のあけほの

もゝとりの聲ものとかに何となく　日吉あさ子
こゝろもはるのあけほのゝ空

花鳥にけしきゆつりてつきかけは
かすみにきゆる春のあけほの　日高かず子

有明のつきはかすみてやまのはに
よこくもかゝる春のあけほの　近藤まさ子

ほの〳〵とあけゆくまゝに吉野山
雲とはなとのいろそわかるゝ　宇高まつ子

もゝとりの聲ものとかに聞えつゝ
しらむもをかし春のあけほの　林　久子

(以下原稿到着順)

春くれはみやこをあさにゆくかりの
こゑるへかすむあけほののそら　小澤ゑん子

たちこめしかすみに花はへたつれと
香はへたてなきはるのあけほの　岡澤千鶴子

花さりのはるやきぬらんやまの端も
おほろにかすむあけほのゝそら　木村きく子

山の端はうすくれなゐのいろ見えて
はなにさえ行くあけほのゝそら　田中ゑん子

月かけのこずゑにのこるやまのはの
はなもかすめるはるのあけほの　輕部壽子

はなさりの色かをこむろはつせてら
かねよりしらむはるのあけほの　中島松子

うくひすの聲ものさかにきこゆなり
はなにかすめるはるのあけほの　工藤仁子

ほの〳〵とそらはかすみて山の端の
はなよりしらむはるのあけほの　松枝雪子

山の端のかすみにのこるつきかけも
おほろににほふはるのあけほの　工藤雅子

有あけのつきのひかりもうら〳〵と
かすみわたれるはるのあけほの　松濤琴子

鐘の音もかすみわたりてやまの端の
はなよりしらむはるのあけほの　西川順子

和歌の浦やかすみのおくになくたつの
こゑのさかなるはるのあけほの　金森さし子

よしの山はなさくころのあけほのは
あめもにほへるこゝちこそすれ　水島良子

ゆく舟もなみもかすみてわかの浦の
みるめもはるのあけほのゝそら　松井佳子

よこ雲のたなひくはるのやまのはの
あけほのしろくはなや咲くらん　根岸英子

ありあけの月もかすめるさほやまの
あけほのしろしはなやさくらん　春木紫子

和歌の浦に浮ふほかけもかすみつゝ
けさはのさけきあけほのゝそら　荒木すま子

かすかなる月はのこりてにはさりの
こゑこゝちよきはるのあけほの　近藤秀子

遠山のはなのさかりはさくらいろに
かすむさいはんはるのあけほの　荒川奈波子

われひとり旅する身にもうれしきは
あふさかやまのせきのあけほの　西村さら子

あかつきに雲ほあさなくはれゆきて
いりひまはゆきはるのあけほの　濱口直子

花の香もふかきかすみにこもりつゝ
はつせのやまのはるのあけほの　濱口信子

舟はかりよそのかはせをのほるなり
まつあけほのゝそらやなかめん　神田靜子

みわたせは水おさもせすすみたかは
ふれもほのかにかすむあけほの　町田定子

さゝなみのしかの浦なみほの〳〵と
かすみわたせるはるのあけほの　大島あい子

すまの浦うかふしらほもかすみつゝ
こゝろうれしきはるのあけほの　浦島かめ子

うぐひすの聲もにほひてのどかなる
けしきもうかぶあけほののそら　酒井小谷子

ありあけののこれる月もほの〳〵と
かすみにしらむはるのあけほの　浦井豊子

うぐひすのこゑも匂ひてほの〳〵と
はなにあけゆくつきかせのさと　浦井濟子

をち近の木々も見わかぬあけほのに
はなのありかをかせは告げけり　堀內敏子

世の中のさまをもこめてゆかしきは
かすみこめたるはるのあけほの　臼井美幾子

花の香にゆめをさそしてなくとりの
こゑよりしらむはるのあけほの　野田千代子

すみた川はなのにほひにほの〳〵と
みつの上しらむはるのあけほの　神田夢子

花の香もふかきかすみにこもりけり
あらしのやまのはるのあけほの　荒川靖子

しき島のわかのうらなみしつかにて
たつなきわたるはるのあけほの　長島諒子

すみれ菜をつみし跡かもはるかすみ
ゆかりのいろの野邊のあけほの　長島賢子

百とりのさへつるこゑもたかりけり
あめしつかなるはるのあけほの　近藤梅子

いひしらぬなかめなりけりみ吉野の
はなよりしらむあけほのゝそら　岡田紗子

よしの山かすみのおくにほのみえて
はなよりしらむはるのあけほの　小川富子

しまかけてこく舟もあれあかしかた
ほかけそかすむはるのあけほの　荒川清子

はるの夜は峰のくもよりしらみつゝ
はなにあけゆくみやまへのさと　高橋直子

うぐひすの聲もかすみてほの〳〵と
はなにあけゆくしらすかのもり　秋園つる子

ほの〳〵と夜は明けそめぬすみた川
はなとつきとのいろぞわかるゝ　西村芳子

かすみたつ明石のうらにこくふねの
ゆくていろそふはるのあけぼの　吉川伊勢子

すみた川名にたつはなのにほひのみ
かすみかれたるはるのけあほの　吉川島子

有明けのひかりをこめてほの〳〵と
かすみにしらむはるのあけぼの　松井桂子

さきにほふ花にしらみてやまもとの
まつはよふかきはるのあけぼの　根岸初音子

いたつらになからふ身にもかひありと
おもひしらるゝはるのあけぼの　溝口[illegible]子

さきにほふ花の木の間にとりなきて
かすみこめたるはるのあけぼの　竹山君子

すそのへはかすみて暗き富士の峰の
ゆきよりしらむはるのあけぼの　高峰花子

かねの音もひゞきわたりてさく花の
かすみてしらむはるのあけぼの　花岡香子

をちこちのさくらも今かひもとかん
かすみたなびくはるのあけぼの　白井球子

いつはあれとかすみに匂ふみよし野の
やまさくら戸のはるのあけぼの　成田延子

見わたせば雲よりかすみたちそへて
ながめたのしきはるのあけぼの　芦澤萩子

かぎりなき春のあはれをつきはなに
こめてぞしらむあかつきのそら　山本のふ子

もゝちどりさへづる聲にねざむれば
かすみたなびくあけぼのゝそら　澁守元子

世のなかをうしとすてにし山ひとも
こゝろにかなふはるのあけぼの　山本常子

ほの〳〵とかすみこめてぞをち近の
みねわかぬなるはるのあけぼの　田部里子

四方の山はなよりはなにあけぼのの
かすみぞそらのあやをなしつる　佐々小琴子

うぐひすの聲うるはしきあけぼのは
こゝろもそらにうきたちにけり　佐々有鄰子

松たけのみどりをそへてうちかすむ
そらのどかなるはるのあけぼの　澤田春子

うくひすによひ覺されてたどりつゝ
ゆめをしからぬはるのあけぼの　屋舗すなほ子

咲く花にひかりゆつりてありあけの
つきをちかゝるはるのあけぼの　屋舗かをり子

春がすみなびくをうけに行くかりの
こゝろあやしきあけぼののそら　後藤みや子

あしたつのちよの聲よりはる〳〵と
しらみそめたるはるのあけぼの　湊谷いく子

出羽のうみ渡島をさしてゆくふねの
かすみにつゝくはるのあけぼの　谷口さた子

うつし夜もいかでおよばん春かすみ
はなにはれゆくあけぼのゝそら　谷口ふさ子

くれなゐの月もかすみてたかねより
まつあけそむるはるのあけぼの　矢島にい子

よこ雲のはなれんとすれどうす霞
たちこそわたれなきつしまやま　藤島英子

しまやまはかすみに消ねて三保の浦
まつのこすゑはしらみ初めけり　土岐幾子

つきかげもおぼろ〳〵にかすまれて
あはれさふかしありあけのそら　土岐よね子

ほのぼのと明石のうらのつきかげは
かすみがくれにはなにうつれり　佐々敏子

あけぼのゝかすみがくれにさく花の
かたかそへゆくこゑもなつかし　江口とみの子

うぐひすのこゑも聞ねてほのぼのと
あくるかはなのよこぐものそら　森やす子

なかぞらに花のいろのみあけそめて
やまもとかすむはるのあけぼの　有馬たね子

百千どりさへづるこゑにめざむれば
かすみもにほふはるのあけぼの　白石ひら子

なほまだきかたたのあらしおと絶ねて
つきとやまこふはるのあけぼの　宍澤志津子

ほの〳〵と明け行く空をながむれば
はなよりかすむ四方のやま〳〵　平松管子

ありあけの月のかげさへかすみつゝ
ほの〳〵しらむはるのあけぼの　無名

ほの〳〵とかすむなかにも横ぐもの
見ねてうれしきあけぼのゝそら　石川類子

いつはあれど春の始めのあけぼのは
鳴くとりの音も千世ときこゆる　石川久子

よし野山はなかふゝきかふくかぜの
身にしみわたるあけぼのゝそら　石川らく子

こゝろあらんひとに見せばやわが山の
はなよりしらむはるのあけぼの　山田琮子

ほの〳〵とをちの村やまかすみして
はなよりしらむあけぼののそら　石井英子

おのづからうすむらさきによこ雲の
わかれてにほふはるのあけぼの　青木たま子

鳴きわたるひばりの聲もかすみつゝ
こゝろうれしきはるのあけぼの　廣田さめ子

ほの〴〵とあけゆくはるの花ぐもり
よしののやまもかすみそめけり　磯野こと子

ありあけの月はかすみにきねゆきて
はなよりしらむはるのあけぼの　植田てふ子

山のははなに志らみて見ねながら
ふもとをくらきはるのあけぼの　遂戸路子

春たちてくもゐになびくみれ〳〵は
かすみそめたるあさぼらけかな　田中ひろ子

横ぐもはみねにかゝりてふもとなる
はなよりしらむはるのあけぼの　山崎沙子

鳥の音もかすみにこめてほの〴〵と
はなよりしらむあけぼのゝそら　名取よし子

ありあけの月もおぼろににほひつゝ
しらみそめたるはなのいろかな　名取千代子

こゝかしこ花のあたりはしらめども
かすみにくらしあけぼのゝそら　坂田きみ子

しらみゆく花のいろのみほの見えて
にほひにかすむあけぼのゝそら　名取正代子

みはたせは花もきとはもなかりけり
これやかすめるは春のあけぼの　松尾愛子

百千どりさへづるこゑにねざむれば
かすむうらわのはるのあけぼの　吉田三千代子

花の香をかすみにこめてうぐひすの
こゑものどけきはるのあけぼの　長松かね子

はなはまだ咲かぬ野山もほの〴〵と
ねもかけににほふあけぼのゝそら　稲原菫子

はなどりのいろねの外にのどけきは
かすむとやまのあけぼのゝそら　久間春子

うしとみし花のあらしゆめのさめて
まどしづかなるあけぼのゝそら　小川愛子

うぐひすの聲を知るへにやまかつの
みちふみわくるはるのあけぼの　陶山妙子

咲くはなかつもる深雪かしらくもの
よしのわたりやはるのあけぼの　陶山孝子

しのゝめの明かたちかくほの〴〵と
かすみもにほふはるのやまさと　本郷乙子

うら〳〵と明けゆくそをみわたせば
いはんかたなくかすみこめたり　本郷睦子

ほの〴〵とかすみし月のかげおちて
はなよりしらむはるのあけぼの　金山ゑい子

うら〳〵と霞むかたよりほのみえて
さくらにしらむはるのあけぼの　高橋かね子

月はいまはなのはやしにかくろひて
かすみわたれるはるのあけぼの　田中みつ子

咲きにほふ峰のさくらのはなの色に
かすみて野へは明けそめにけり　成瀬あさ子

よこぐものわかるゝそらに有あけの
つきものどけきはるのあけぼの　井汲春野子

もゝ鳥のさへづるこゑものどかなり
かすみにしらむはるのあけぼの　花山春子

こゝのへのみそのゝ花のいろよりぞ
くもゐはるかにしらみわたれる　赤羽わかえ子

しろたへに上野のさくらみえそめて
はなよりあくるあけぼのゝそら　小野あき子

かならずはたれか梅とや知りなまし
かすみにむせふはるのあけぼの　綿野りき子

窓押せはかすみにゝほふあさひこの
さし入るかたにうめか香そする　岡澤のぶ子

庭の面のうめか香おくるはるかぜも
まだうらさむきあさぼらけかな　岡澤倫子

朝かせにはなもかほりてうくひすの
こゑよりしらむはるのあけほの　西説子

あかつきをつけくるかねの音さへも
かすみにこもるはるのあけほの　鹽路花枝子

山のはもそらもものとかにうら〳〵と
かすみにゝほふあかつきのそら　榊原八千代子

はなとりのいろねもうとくのへ山邊
かすみこめたるはるのあけほの　中山嘉壽子

さくら花かすみのおくにみねそめて
ほの〴〵しらむあけほのゝそら　近藤服子

見わたせは花ももみとりもなかりけり
かすみにあくるみよしのゝやま　野口さん子

梅かゝになきてうつらふうくひすの
あるじかほなるはるのあけほの　濱野さき子

長き夜もはやあけぬとてうくひすの
ひとこゑなのるはるのあけほの　所佐以子

はなさかはないかならん吉野やま
おもかけかすむはるのあけほの　瀧か代子

ありあけの月もおほろにやまのはの
かすみはてたるはるかあけほの　持地桃枝子

見渡せはをちのやまのはかすみけり
花にあけゆくはるのあけほの　川原かた子

やま里のありあけ月夜かけきえて
かすみわたれるはるのあけほの　濱田なほ子

ひさかたの月もかすみてほの〴〵と
はなよりしらむはるのあけほの　溝越むら子

あしひきの山にのこれる月かけの
かすみそめたるはるのあけほの　平尾しげ子

ありあけの月は尾の上にかすめとも
そらよりしらむはるのあけほの　穗積[illegible]子

すみよしのうらの松原ほの〴〵と
なみよりしらむはるのあけほの　[illegible]子

かへりゆく雁もをのへに入るつきも
さゝめまほしきはるのあけほの　小林ふぢ子

山の端はかすみにこめてほの〴〵と
よこくもしらむはるのあけほの　高井[illegible]子

のどけさをなにゝたとへむ花とりの
いろねをこめしはるのあけほの　増田丹貞子

かすみたつ山さくら戸のあけほのは
はるのいろかはみなこもるらん　増田滿須子

打むかふあさけのそらのあけほのに
はるのけしきのこもりぬるかな　諸井くら子

天の戸のかすめるそらもあけほのに
にほふはるへそのとけかりける　[illegible]ちか子

間ちかく鳴くうくひすを聞きつゝも
ゆめうつゝなるはるのあけほの　失名

ほの〳〵さこき行く舟のかけみえて
なみよりしらむはるのあけほの　下村貞子

こゝろにくきかきりこそ思ふ花鳥の
あはれあかれぬはるのあけほの　上原能夫子

さやかなる月にもまさるなかめかな
おほろにゝほふはるのあけほの　野中あさ子

ねさめする人やみるらむはるはなほ
あはれもふかきはるのあけほの　上野君子

いひしらぬ齊うなはらのけしきかな
なみよりあくるはるのあけほの　重松たか子

花さりのいろ音ゆかしきあはれさな
さりあつめたるはるのあけほの　由井浪子

吉野やまみねのあらしもゆきさふり
はなよりしらむあけほのゝそら　高松貞子

みねつゝき咲ける花かさみねにけり
よこくもわたるはるのあけほの　井原銈子

浪わけていつるあさ日ものさかなり
ふたみかうらのはるのあけほの　山根久子

きのふけふにほひそめたる梅かねに
かすみて見ゆるあけほのゝそら　萩原章子

うくひすの鳴くひさ聲にねさむれは
のさかにしらむはるのあけほの　仁保しま子

見わたせは野へも山へもうら〳〵さ
かすみにけりなはるのあけほの　後藤のよ子

山きはのすこしあかりてさくはなの
おもかけにほふあけほのゝそら　横山卿子

打なびくかすみのまよりあけそめて
はるさはしろきあけぼのゝそら　渡部千世子

梅か香のねやのまくらにかをり來て
ねさめうれしきはるのあけほの　梅田まさ子

さく花もひさつになしてかすみつゝ
ほの〳〵にほふはるのあけほの　服部かつみ子

うめか香にありあけ月もにほひけり
あはれつきせぬはるのあけほの　松岡浪子

しらみゆくさほやまからすひさ聲に
はるめきわたるあけほのゝそら　北村左枝子

明ほのゝかすみたなひくうなはらに
つりふねおほきはるのあさなき　羽田三緒子

わすられぬなかめは花のしたかけに
いつる日をまつはるのあけほの　河田いし子

うくひすも梅のねくらをたちいてゝ
なくねのさけきはるのあけほの　田河田ふく子

ほの〳〵さあけゆく空にうすかすみ
たなひきにけりをちのやま〳〵　岸浪子

月かけははなにかすみてうくひすの
こゑのさかなるはるのあけほの　野間繁子

咲きにほふ月か瀬やまのうめの香に
かすみてきこゆあけほのゝかね
清水須美子

みよし野の里はかすみてほの〳〵と
はなにふけゆくあけほのゝそら
諸井貞子

富士のねにかすみはこめてしら雪も
はなさし見ゆるはるのあけほの
志々目いは子

さくら色にかすみ匂ひていひしらぬ
なかめなりけりはるのあけほの
矢島みよ子

山のはもそらもひさつにかすみつゝ
はなよりしらむはるのあけぼの
川崎しつ子

月かけをかすみの袖にのこしおきて
そのへのはなのひましらみゆく
島山千代子

ひさ樂のさほやまからすなくなへに
はな見ねそむるあけほのゝそら
畠山ゆき子

やま〳〵にかすみなひきても〻鳥の
こゑのさかなるはるのあけほの
奈賀井瑚梨子

はなや匂ふさりやはうふかすかのゝ
のさかにしらむあけほのゝそら
飯塚みつほ子

例ふへきふみもことはもなかりけり
はなにふけゆくしのゝめのそら
上田たづ子

さくらさく峰はかすみて花のいろの
くも井ににほふはるのあけほの
池上幸子

月かけのかたふくまゝにほのほのと
かすみにほへるあけほのゝそら
佐々木庸子

かすみたつ空ものどかにあくるなり
はなのさかりのはるのあけほの
下田歌子

もえいつるやなきの糸のいろなから
かすみめこたるはるのあけほの
武田榮子

はなさりの色かのほかにさよひめも
こゝろにそむるはるのあけほの
武田なか子

ほの〳〵とあけゆく空ににほふなる
はなよりかすむはるのあけほの
武藤いれ子

山のはのはなもにほひてほの〳〵と
しらみわたれるはるのあけほの
岡田ひさ子

わたのはら霞むなみまにつきおちて
あはれもふかしうらのあけほの
阿保松子

田子の浦まだあけやらぬくもの上に
ほの〳〵にほふ不二のしらゆき
澤田結子

かすみたつ空にまひつゝ鳴くたつの
こゑものどけきはるのあけほの
近藤琴子

鐘の音もかすみてさほきひむかしの
やまにあさひのいまのほるなり
中田興子

きり齊業鑿のあけほのいつはあれさ
はなくもにほふはるにしかめや
大河内長月子

花咲けるたかねより先つほの〳〵と
しらみて見ゆるはるのあけほの
伊倉田龍子

かすみても花のにしきそあらはるゝ
さよあしはらのはるのあけほの
沼澤みれ子

川そひのまつもかすみにうつもれて　みつおとたかきあさほらけかな　飯淵たか子

一月廿日兼題　習慣

天　東京市麹町區元園町一丁目六番地　白井とな子

聖人は、生れながらにして聖なりとか、されど、なべての人の、母の胎を出るや、まことに素糸の如く、誰かははじめより其黒白を分つべき、やう〳〵生長するに從ひて、さま〴〵の見聞により、種々の習慣をつくり、終に、赤くはた黒くは染まるなり。然れど、幼きより遊惰のならひをつけんか、終には放恣無頼の徒とならん。常に謹勉にして規則正しきならひをつけんか、いさゝかにても不規律の事をなせど、終日快々たるに至るべし。人の幼き頃よりの習慣は、いとも改めにくし。されど、身に悪習あるを悟りて、これを改めんと思はゞ、常に克己の心を強くして、よき方にうつさんと勉め〳〵でやはあるべき。まことに、習は性となりゆくものにしあれど、いかでおろそかに思ふべしやは。

地　備前國和氣郡閑谷　西艶子

世に、習慣ばかり、おそろしきはあらじ。わきて、幼きよりの習慣は、能きも悪きも、年へていよ〳〵あらためがたく、はては、其人の性質となりて、亦あらたむべくもあらじかし。凡人の世に生れ出づるや、世に比類なき、すぐれ人の外は、いかではじめより、よしあしのけぢめあらんや。ものわきまへぬ、みどり子の心は、唯清く美しきを、そがならはしによりて、世にいさを有る、めでたき人にも成りつへく、世をも人をもなやます、悪き人にもなりつべし。されど、昔、唐土の某とやらんは、白糸を見て、此の糸の今はかく白く美しきを、いろ〳〵に染められては、また元の白糸にはかへらじ、實に、人も、かくぞ有りけるとて、涙に袖をぬらしけりとぞ。實に理りなりや。一度悪き習慣におちいらば、またあらたむべくもなし。事しげからぬ折など、心ゆるして、一日二日朝いすれど、そが習慣の、たやすうはあらためがたくて、心にもあらぬ朝いに、知らず〳〵、身を怠りに導きて、果ては口惜き人にもなりつべし。たゞこの一事ばかりかは。萬の事、大方は、習慣のよしあしにこそよりつらめ。實に心すべきことにならん。

人

高知縣高知市九反田　上田たづ子

人の、賢きも、愚なるも、皆其天性に、よるものなれど、又、そを種々に變し、わるは、善くもなし、惡しくもなすものは、教育の力にて、そが中にも、殊更大切なるは、習慣てふ事にこそ。かく斗り、この業の、教の道に、勢力あるものなれば、古き諺にも、習慣は、第二の天性なりといへり。げにうべなる言にこそ。例ひ、いかなる、なし難き、事たりとも、撓ますなし、遂に、そが習慣つきなば、其より後は、いと易うなりぬべく、なかなかに、なべて、容易きこと、、思ふわざよりも、輕き事となりぬべし、又己れだに、惡しと、思ふ斗りの、事なりとも、度々なしなば、遂に、そが習慣となり、後には、惡しと、思ふ心さへなく、人の咎めに、やうやう心付き、遽に改めんとするも、いといと難きこと、なるべし。されば、人々、幼きより、れのがし、、心をこめて、善きならはしを作り、後日の悲なき樣心すべし、去かはあれど、いかに、賢き人たりとも、かの何がしの、いひけんやうに、人毎に、一つの癖の、なきは稀なり。されど、賢き人は、早くも惡しきならはしと、さとりては、疾く心を用ゐ、克己てふ、たふとき心もて、自ら戒め、つとめて、之を矯むる程に、自ら、ひがみも、人目には見えず、なりゆく。かのよく兒子を教へしとて、音高き、成田喜和の妻、福島氏も、元雷を、いたく畏るゝ、性なりしに、一度、兒子を、育てしより、子のまねなば、ゆしき事よと、忽ち、心を勵まし、其折々には、襟を正し、露も恐れぬ樣、せしより、程なく、其が惡習も、止みぬとなん。心すべきにこそ。

（以下原稿到着順）

芦澤萩子

足引の山又山の奥に入りて、ましらなす、梢にのぼり、こほこほと斧の音たてて、木こる杣人、わたの原、山なす波に身を打たせ、あさり漁どる海士の子等の、もし其はずみを、あやまりたらんには、玉の緒のいのちの限りも計るべからずといへども、之を心とせずして、いと安らかになしおほするは、何によりて然るか、唯この習慣の之をなさしむるなるべし、習慣の力又大なるかな、夫れ、人、各其面の異なるごとく、受け得しさがのけぢめは、あれど、これまた能く動かすものは、ならはしなりけり、故に、習慣は第二の天性なりといふ、うべや、古より、性相近く相遠しといへり、蓋し善も惡も皆此習慣によりて、別るゝの謂ならんか、抑も世には樂しみあり、苦しみあり、善き事あり、惡しき事あり、幸なることあり、不幸

なることあり、徳なるあり、不徳なるあり、兩者交々相雜る、人其間に立ちて行す、業より後者を避け前者につかんとするは、人皆のほりするところなるべし、然るに兩者其間に明かなるへだちあることなく、只時により、處に從ひ、又已が心のさがによりて、善ともなり、惡ともなり、徳ともなり、不徳ともなるもの多きぞかし、例へば、世界を大學校として樂しむ人もくれば、浮世としてかこつ輩もなり、西洋のよしとする男女同權は、此方にはふさはず、古のめでし、あたうちは、今の世には許さるることなきが如し、夫れ斯くの如く、同じ事といへども、其人により、其國により、又其時によりて、さまざまにけぢめして、思はしむるは、何によりて、然るか、皆此のならはしの、之を導きしなり、又下等社會は、日日其身を苦しましむるに慣れて、なかなかに高尚なる作業を好まざるものゝ如く、これ其はじめいとゝかなることゝ、さては思ひもよらぬあたりより、終に習慣とはなりしなり、されば、一と日をも等閑になす可からざるものは、此習慣なりけらし、それ心なき草木すら、なほ、ならはしによりて、そが枝おのがむきむきなり行くものを、ましてや、萬のものに勝りて、たふとき人に於てをや、なにゝまれ、よくよく心して、其始めを愼み、世のかしこきみちをつとめて、怠らざらんには、それやがて習慣となりて、誠の樂しみ又おのづと其うちに來るべし、あはれならはしの德大なるかな、されば、誰人にまれ、あらまほしきは、よろづ此のよきならはしになむ。

西川順子

學ばんよりは慣れこそ、といへる俚諺は、幾度くりかへすとも、つきせぬ味ぞこもりぬる。實にや、人がらの優にやさしく、しかも心の高尚にして、他の人々よりは敬ひ仰がれ、一門よりは睦び愛せらるゝも、はた、その品位のいやしくて、一族よりはいみきらはれ、他人よりはつまはじきして後指さゝるゝも、皆、幼きより、習慣の善惡によらぬはあらじかし。よしや、かくまでならずとも、あるはつゝしみ深しといひ、あるはつゞまやかなりといひ、あるは放逸遊惰などいふも、何程かは天性ともいふべけれども、多くは習慣の染めなしたる色に外ならず。あたらんもの、幼きより、この習慣によりて、あしき色に染みたらんには、ものゝけぢめを分ちうる後に至りて、あらためまほしく思ふとも、いかでいかで、身をくるしめ、心をなやますのみにて、そのかひやなからまし、あはれ、おそれてもおそるべきは習慣にこそ。

佐々有鄰子

京は都の手ぶりあり、田舍は里の習ありて、新玉の年のはじめより、師走の月の下旬まで、朝に夕に、千早振神代より守りつたへ仕へきたりし習慣は、西洋より流れ來る種々雜多の手だてを以てみちびく人ありといへども、大和錦の旭ににほふがごとく、豐葦原の水穗の國の名にそむかず、いとうるはしき民草の心の色は、いよいよまします大和錦のそこふかくそめなすものから、國の習慣こそ、いといとたふとけれ。

佐々とし子

およそ、人は、生れつきの、よしあしに、かゝはらず、をさなき時のならはしにより、よくもあしくも、なるものぞかし。されば、習慣は、第二の天性とか云ひて、人みな心を用ふることにこそ。野山に生ひたる、草木は、心のまゝにおひたつことなれば、まがりたる

も、ゆがめるもありて、すなほなるは、極めて少なし。されど、園丁の手に成長せしむるときは、ゆがめるふしはため、よからぬ枝葉をかきはらひ、雪霜の害を防ぎ、あめつちを、よきほどに、施し、みにはよからぬ處をば、巧につくろひ、心を盡して、そだつるが故に、すぐれて、うるはしく、生ひ立ち、千歳の、あたひを生ずるに、至るべし。人もまた總すぐれたるも、すぐれぬも、賢きも、おろかなるも、くさぐさあれど、是れ皆人なり、生れつき、いかにちがひあるも、よきならはしにより、うるはしき、人ともなりぬべし。されど、ねぢけたる草木の、年たけたるは、いかに、園丁なりとも、たむること能はず、人も年たけたるのちは、よきならはしによりて、其人がらを改めうべからざれば、ものごとに、すること、をさなき時に、よきしつけを施すべし。世のことわざにも、三つ子のくせは、八十路までとか云へり、心すべき事にこそ。

廣田とめ子

目さまし時計の響も、怠りを誡め、聞きなれては、朝いの夢は覺めじ。凡て、人は、善に惡に、行ひを重ぬるに從ひ、遂には蓼虫のからきをしらず、わざとならずして生れつきたるやうになるものなり。如何に教を受け、文の卷々讀み盡したりとも、意のたしかならぬには、其甲斐あらじ、故に、人は、意を誠にし、道を踐むの習慣こそ、實にあらまほしけれ。

田中ひろ子

國に、一家に、人の心に、習慣ありて、一度惡習の起り初め、いよいよ深う、つもりなば、國を滅し、一家をほろぼし、一生をあやまる基なり。さるを、あさはかなる者へもて、あやうしとも、おそろしとも思はず、事の起りをさゝたる事と、打捨て置きなば、つもりつもりて、終には如何とも、せんすべなうなりはてなん。其の時いかに、くゆるも益なき業にしあれば、人たるもの、よくよく此道理を區別して、世を渡り行くこそよかんめれ。げに恐るべく、愼むべきは、此の習慣にこそ。

名取正代子

それ、人は、性もと靜と、古きをしへにもいへり。されば、此の世に生れいづるより、其の本性をそこなふことなく、よきならはしを附けぬることこそ大切なれ。人の、靜となり、惡となるも、皆、其の幼き時のならはしによるといふ事、恰も白き糸をそむるが如し。一たび、ひがみまがれる癖つきて、あしきにそまりぬれば、終には習慣となりて、容易になほらざるものなり。これ、かにの横さまにはひて、おのれすぐなりと思ふが如し。されば、習慣には第二の天性となるべしと、さる人はいへり。まことに、心すべき事にこそ。

久間繁子

籠に飼ひならしたる鳥は、放ちやりても、又もとに歸り來とよ。これは、年頃飼ひならされしを、忘れぬなるべけれど、度々放ちやりたらんには、自然長閑き春の日の、柳に移り花に宿り、友どちとも、なれて、終には、いぶせかりしもとの籠には、歸らざるべし。されば、習慣は、堅く忘れ難きものなれど、又新しきに移る事もあるめり、おのれ、父に從ひ、かしこゝに、移り住みて、やうやう慣れ來し、學校又は友だちも、替る毎には、物悲しくて、もとなれし方のみ、戀しかりしも、月日經るに隨ひては、又新らしき方も、よくなりて、忘るとはなけれど、もとの友には、音信も稀々になりゆくも、月草の

うつりやすき心にはあらで、自然のわざなりけらし。かく、住所も定まらねば、教の師も定りなく、又不幸にも、早う母に別れ、暇なき父と兄との、教育を受くるも、もとよりおろかの身なれば、いかでか、女の業になれ、女の德を辨へ得べき。裁縫の道、庖厨の事さへ、おぼつかなきに、まして、高尚の學識に、進まんなどは、かけても及ばぬ事にて、只ふるき習慣により、貞節をもて身をたて、温順をもて家庭を修め、三從の道を守らんなど、口にこそいへ、誠に身の上に行はん事、いさかたしや。

わが常に學びの師と、信愛せる、女鑑發行の日を待遠に、のみ思ひわたりて、よの令嬢がたの、ざは富み、技藝に進み、たまふを羨むのみ、思へば、はかなく、行く末頼もしげなき、我身なりけり。さはいへ、はや十九といふ齢をも、むかへたれば、いつまでか、女は卑屈に、男子におとしめらるゝ、習慣のみを、女の道と思ひ過さん。彼の燕の、長閑き春の野になれては、もとの籠にも、かへらざる如く、おのれも、早く舊慣の心を改め、都會の地に遊び、よの令嬢がたともに、文化の新習慣にしたがはまほしうなん。

小川

けふは節分なれは、歌がるた初め給へとて、日の暮るるを待ちつけ、燈のもとに、弟どもよりくる程に。隣にやあらん、豆蒔に、福は內、鬼は外など、いひ罵る聲。かしましく聞ゆれは、いかなるまれひにや。をしへ給へと問ふに、こは。古き例にて、殿掌の頃とか、大内にて始めたまひ、その折は、殿上人など集ひて、鬼の役つとむる人を、桃の弓あしの矢もて、追ひ給ひしとぞ。彼の屏風の端にても見しならん、今の様に豆うつ事には、鎌倉の頃の後より、變りしものとか。何れも、師走晦日の御儀式なりしを、今は、節分にものする習慣つきて、私の家毎に古き例とて殘れるなり。凡て習慣にも。いろいろあれば、強て昔の手ぶりはた習慣とて、そを必らず守るべきものにもあらじ。餘り罵り騷ぎて、寐める人、近き隣などに障りたらんには、心すべき業なりかしなど、いひて、吾身を省みれば、この里の習慣とて、かみげ。丸まげに結ひ、齒くろめさへ含みつるは、家の人々にそゝのかされ、心にもあらずせし事とはいへ、今さら、弟にいひし事の恥しうて。

岡澤倫子

なべて、世の中の人の、さがよきとあしきと、生れ出でし初めよりけぢめあるものかは。たゞよきとあしきとは、常々なすわざの、よきあしきが、自らくせづきぬるものならし。妾幼きとき、父母の教へいましめ玉ふことの、嚴なるものから、夜いぬる前に、學校にて學びし書、一わたり讀み終ふべきよし、定められければ、怠らず物しけるに、後には、くせつきて、讀み終へず寐し夜は、眠られずありしが、一とせ〳〵齢まさる毎に、父母の御言、なほざりにすとにはあられど、讀みの心のうすくなりけるにやありけん、父母のくせつけ給ひしよき御教の、いと畏こしとは念へど、夜に入りて、しばし文よむに、まゝ眠もよほさるゝ事のあるこそ、げに口惜しけれ。毎毎によき習はしの失せ行きて、さがにしくなりにけるよと、思へは、そら恐ろしうなん。又儲なる姿容が、髪さへ、梳し結ばさらましかは、直にくせつきて、しなおしくならましを、ましてあの上にはと、思へば、外つ國人の言ひけん、習はしは、人の第二のうまれつきなるとは、實にことわりにこそと、思ひ出つるまゝ、かい記して、後

の戒めになんなし侍る。

穗積稔子

人各々性情を備ふ、其相異なる事、尙おもかけの人毎に同じからざるが如しとかや。されば、男子にして溫厚柔和德行に勝れ玉ふあれば、女子にありて、却て、頑癖不德、暴沒惡等、之れを何れの點より見るも、誠に婦女子らしくもあらぬあなきにあらず。佛家の所謂、性は善さて、我も人も、一樣に善性たるべき原則に照して、斯も妾樣の現象を呈するは、いぶかしき限ならずや、妾、熟々おもひ見るに、性善の原理は疑ふべくもあらず、如何に猛惡非道の大惡あなればとて、生れながら、其天性を享有ぜりとは思はれず、すでに先天的惡性なしとすれは、あの此世に生れ出づる、其性の純眞無垢なる、之れを物にたとふれは、猶白紙の如し。氣に觸れ、事に當り、自から風吹の色に浸染するあれは、或る事情の爲めには、俄かに赤く黑くなるもあるべきは、主として習慣の力とす。彼の、習慣は、第二の天性と云ひ、また三歳の癖は百迄との俗諺の如き、實に我人を欺かざる金言とす。

されは、妾等、婦女子の、國の爲め、また一家の爲めに、大に心すべきは、日頃婦女自からの心掛を大切にし、一家の平和圓滿を期すると共に、深く家庭の敎育を務め、愈々、ますく、此良習慣を馴致し、幼兒純白の善性をして、汚さず、染めず、能く百年のよはひを終らしめは、假令、英雄豪傑の續出は、容易に望むべからざるも、世に惡性の人を減ずるの、一助たるに近かるべし。いにしへより、士農となく、賢母良妻の家には、非凡の人士を出したるの、實例に乏しからざるは、此の第二の天性なる、習慣を爲なすの道に於て。謬らざりし力多かるべし。婦女の任務、亦重しとす。彼の賢母良妻の跡を、史冊の上に見るは安し、自から後人に觀らるゝは難し。其の難くして、國家の利害に繫ることの主なる點は、習慣を左右するの適否にあり、世の婦紳淑女達、ゆめ油斷なし玉ひそ。穴賢。

小林ふぢ子

夕べ〱門邊をよびゆく盲の按摩あり。氷らんばかりの笛の音のあはれさに、母上は、をり〱呼び入れて、肩などもませたまひぬ。もみをはれは、しばし休らへかしと、火鉢などあたふれは、此の人、いつも火鉢のふちを手もてさぐり、火箸の手にふるれば、また之をさなすさま、いとをかし。そも、他家にまかりたる時、そが居間の裝飾いかにかと、誰も見るものなるに、こは、かなめなる眼見には、心にまかせずて、かく手もてさぐりそめしが、のちには、ならはしとなりて、いつも〱かくするにやあらん。いとむくつけし。されど、世の中に、かゝる癖まゝあるめり。さるは、うつくしき子を持ちながら、そが愛におぼれて、なか〱に子を思ふ心の、めしひとなり、庭の敎へさへ、あやめもわかず、やがて、子の獨り立たん心をさまたげ、あらぬ方にさそふ親なりけり。かゝる盲も、おなじふるまひの、ならはしとなりては、いかで、子の見にくきふるまひの、あらざるべきかは。誠にうたてき限りなりかし。盲の按摩のむくつけきは、さてせんすべなけれども、心の中の盲に、うつくしき子まで、見にくきふるまひせしむることそ、いとあかぬ、心地せられて、親として、いかばかり、おもなきわざならまし。げに、人のみにとりて、ならはしてふ恐ほど、ゆゝしきものは、あらずかし。

松岡濱子

いまだいとけなく、わか木のほどには、よきにもあしきにもたわみやすく、そがよきかたにならひなむには、身を終ふるまで、おのれのさかさなり行きて、身をもなさめ、人をも益すべし。またうらうへにて、あしきかたにならひなむには、身を終ふるまで、よつろにつけ、人をも身をも害ふべし。うべなり、人の世にありて、習慣はかり、大切なるものはあらじかし。

大日本女學會

會員募集廣告

總裁小松宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

●本會賛議員は有栖川宮大妃殿下華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨 本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義録を發行し入學すへき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應し輕佻の風を避け以て貞淑の品性を涵養せむことを期す●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれは今や新に學科を増設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に會員を募集す志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一巻より送本差支なし●本會講義録は女學講義と稱し畏くも　皇后陛下叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一巻の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月參拾錢束修參十錢●會則希望者は郵券貳錢を添て申込あれ

學科及ひ講師 ●修身(女子修身談)細川華族女學校長が從來同校に於て演説せられたる者に係る(禮法)佐方女子高等師範學校教諭●國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授●歷史(日本歷史萬國歷史)大森文學士●地理(日本地理萬國地理)喜田文學士(地文)脇水理學士●理科(物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士(生理衛生)未定●家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝、活花點茶、田邊東京女學館講師

附錄 ●史談下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家●お伽譚、漣山人●詞藻●質問應答雜報雜錄

第一巻既に發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地
大日本女學會

東京茗溪會雜誌

第百八十號

每月一回二十日發行

定價拾錢郵税不要

目次大要○倫理科教授につきて 高師校長嘉納君 ○ルッソーのエミールにつきて 高師教授谷本君 ○師範學校に於ける教育學科 香川師範教諭野田君 ○普通文學改良論 高師訓導石原君 ○讀史所見 神奈川師範教諭内藤君 ○ひらまき貝とつりがね虫 臺灣國語學校教授本田君 ○小學理科物語 高師訓導富永君 ○露の生成 香川師範教諭幸津君 ○修身科教授實驗 高師教諭森岡君 ○小學校用机腰掛取調報告 文部省衛生主事三島君 ○保育實驗談 札幌幼稚園西川君 ○遠藤勝助先生の事 長崎師範長生駒君 ○文苑 福羽美靜君の忠のことは孝のことゝ龤をきゝて○稻垣千穎君の白河[illegible]中雜詠○石井要君の詠史百首○丸山君の春歌及臺灣雜詠各十二首田中君の寔山宅宮水紀勝三篇悴々齊主人の修身のかぞへ歌町田君の臺灣雜詠小西君の和歌及詩等 ○雜錄○高等師範學校紀事等

賣捌所 日本橋區兜町一番地 普及舍 日本橋區本町四丁目十六番地 文學社 神田區末廣町壹番地 博報堂

女學雜誌

第四百五十七號

明治三十一年一月十日發行

前號明治三十年十二月廿五日發行第四百五十六號**要目**

本誌毎月二回十日廿五日發行 一冊定價金十錢半年前金一圓十錢一年前金二圓見本五厘郵券十一錢(內國無郵稅)

發行所 東京巣鴨村庚申塚 **女學雜誌社**

一手賣捌 東京神田區表神保町 **東京堂**

婦學 裏錦

一冊定價六錢
外に郵稅一錢を要す
毎月十五日發刊
毎號六十頁以上

◎第六拾三號（要目）

明治三十一年一月十五日發行

發行所　尙絅社
東京神田駿河臺北甲賀町十三番地

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		
一冊		十錢
六冊前金（三ヶ月分）		五十五錢
十二冊前金（半年分）		壹圓
全國無遞送料		
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十一年一月廿三日印刷
同　年一月廿四日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木良雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八）　國光社

寶石入指環



（一）ダイヤモンド及キャツアイ入甲價八十五圓●乙價七十五圓
●全眞珠及チパール入甲價參拾參圓●乙價三十圓
（二）ダイヤモンド入甲價參百參拾圓●乙價貳百八拾圓
（三）ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓
（四）ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七十圓●全ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五十圓●乙價百貳十圓
（五）ダイヤモンド及キャツアイ入甲價貳百圓●乙價百七十圓●全ダイヤモンド眞珠入甲價百八十圓●乙價百五十圓
（六）ダイヤモンド入甲價百八十圓●乙價百五十圓●全ルビー及サツフアヤ入甲價五十圓●乙價四十三圓
（七）ダイヤモンド入甲價九百圓●乙價四百參十圓
（八）眞珠入甲價參十圓●乙價貳十五圓（市外ハ送料金貳拾錢）

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ装嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレハ寶石入若シクハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アラハ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進ヘシ若シ貴意ニ適ハザル時ハ御講求當日ヨリ一週間（[illegible]店商品中時計ニ限リ三十日間）以内ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應シテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其為ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘザルベシ其他ノ手續ハ屢々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

妙技一等賞牌



東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地
時計及寶玉類賞金圖美術品商（電話番號本局三百三十三）
天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）
天賞堂小川町出張所

大坂市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）
天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛冶屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市萬歳町上野屋方
天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色内町越中屋方
天賞堂小樽臨時出張所

〔明治二十四年八月四日內務省許可〕
〔明治二十五年二月十二日□□書認可〕

（東京國光社印刷部印）